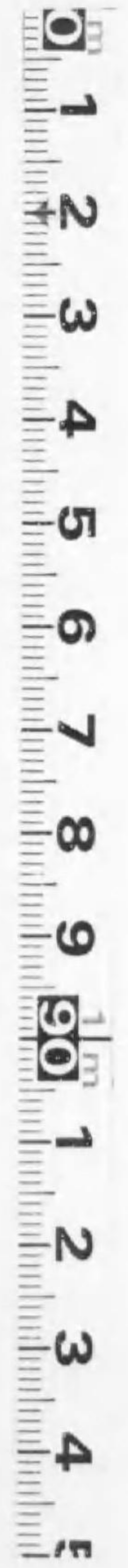
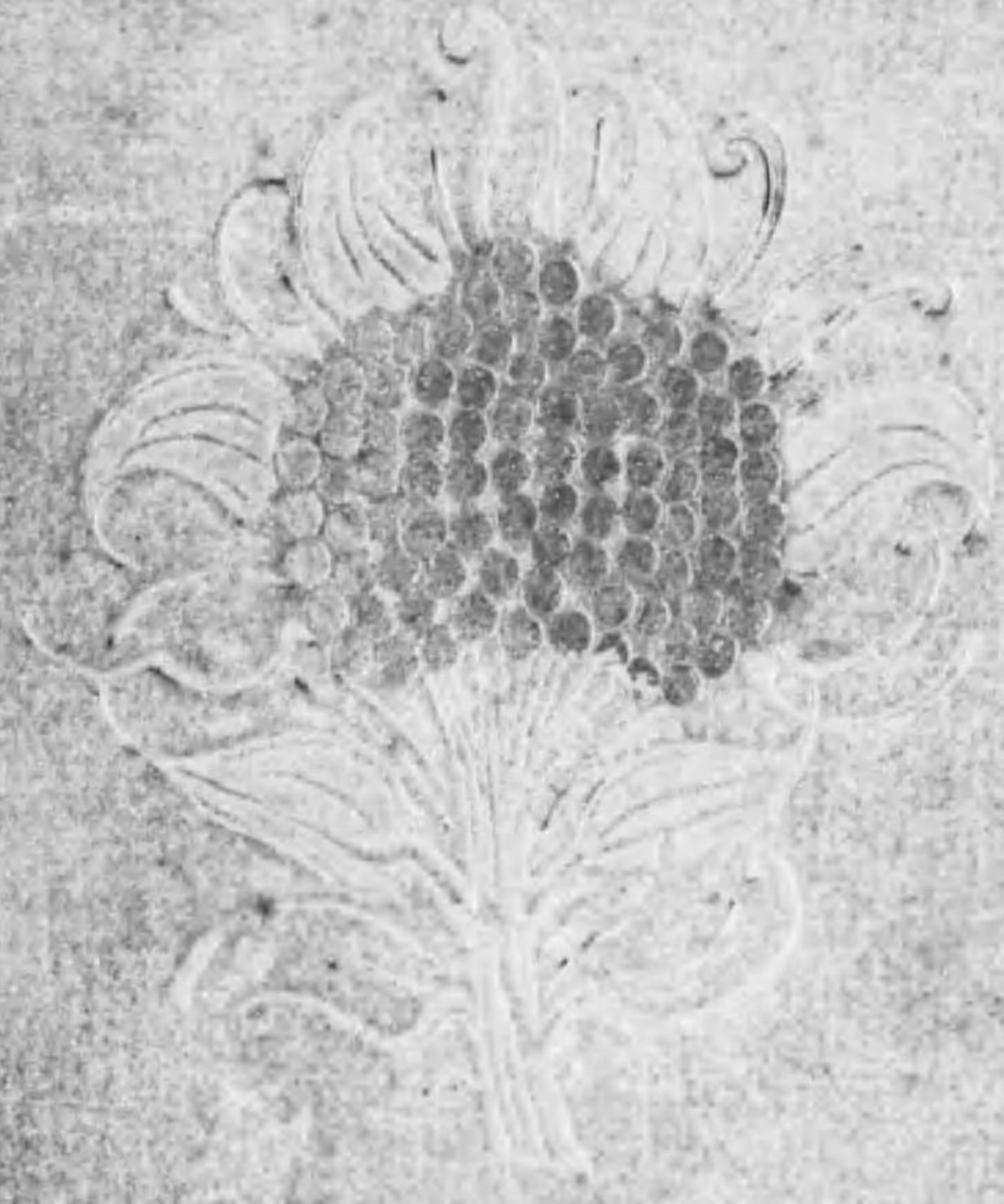


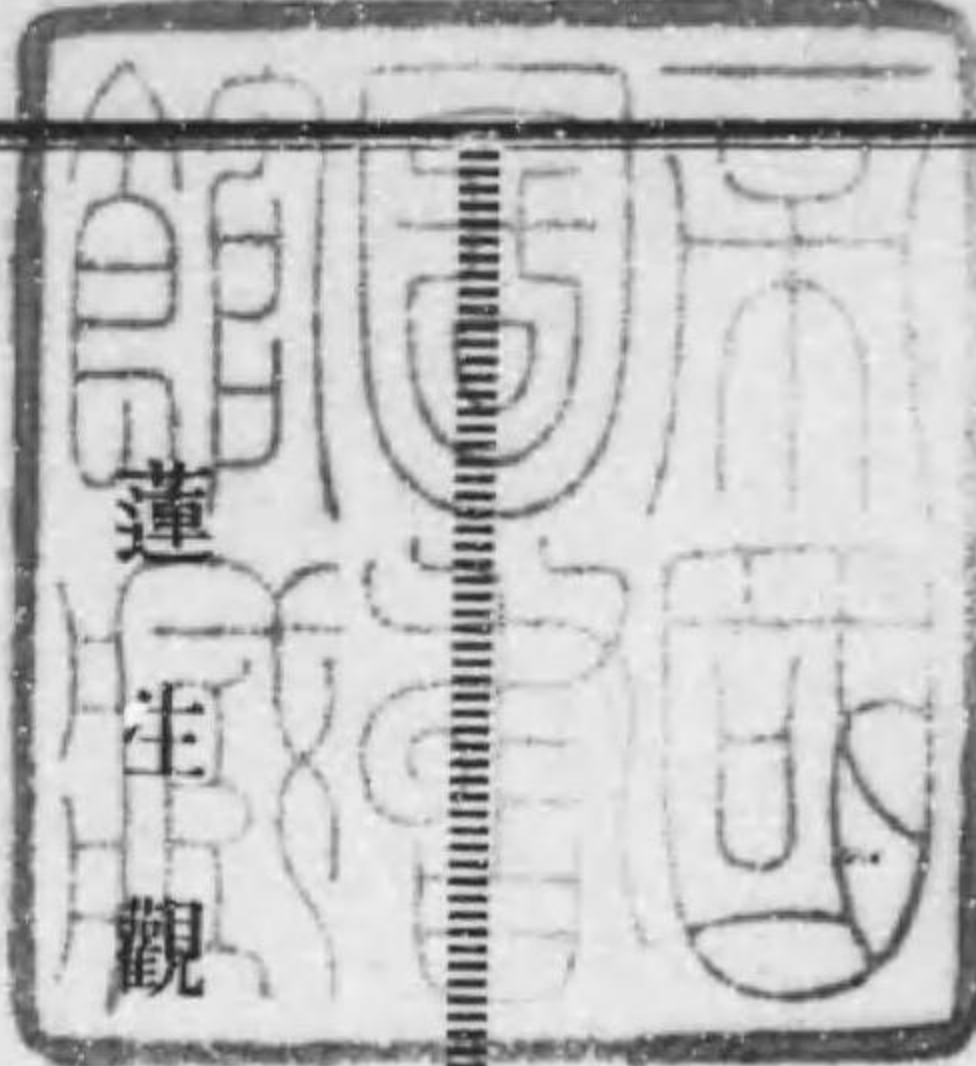
520

32



始





眞言宗大綱

善著

東京 佛教藝術社版

密教研究叢書第壹編

寄贈本

大正
14. 5. 6
寄贈

序

眞言宗の書籍はごうも難々しくて解り悪い、ごいふ聲をこれまで屢耳にして居りましたが、塚本賢曉師はその點に深く慨せられ、密教講習録刊行の大計畫を立てられ、其のお話を承りた際は、心の底から随喜いたしましたのであります。それは眞言宗の民衆化といふ意味に於て、あります。その随喜の微意を表せんが爲め、本稿の執筆をお約束いたし、爾來該講習録に掲載せられて居りましたが、今般その完結を見るに至つたので、之れに訂正を加へ、單行本としてこゝに出版せらるゝに至つたのであります。私はさきに眞言宗要義を出版しましたが、幸に大方の歡迎を受け、二版三版を重ねるに至りましたので、本書はその姉妹篇の積りで書いたのであります。要義は歴史方面に重もきをきまじ

二

たが、本書は聖典祖書の解説に重もきを置きました。要義は教理関係の問題を主として述べましたが、本書は信仰関係の問題を主として述べました。眞言祕密の教義は兎角難々しく成り易い、それをどうか難々しくならないようご力めた所に苦心が要するであります。併しそれが爲めに意味の盡くさない所や、痒い所へ手の届かないやうな點の多からうことを遺憾に思ひます。その點は平に御諒怒を乞ふ次第であります。幸に本書に依り眞言宗へ入門研究の一助ともならば、望外の大幸であります。

大正十四年一月一日

京都六大新報社にて

幽 芳 生

眞言宗大綱目次

緒 言……………一

第一章 宗 要……………四

- 一、眞言宗教團の概観……………四
- 二、眞言宗の起原沿革……………九
- 三、立教開宗の主張……………一四
- 四、事相教相の二方面……………二〇
- 五、信仰上の諸相と本質……………二三
- 六、眞言宗の研究法……………二七

第二章 聖 典……………三

- 一、大日經の梗概……………三

眞言宗大綱目次

二、	金剛頂經の梗概	三四
三、	即身義の大意	三五
四、	聲字義の大意	三六
五、	吽字義の大意	三七
六、	二教論の大意	三九
七、	寶鑰の大意	四〇
八、	秘鍵の大意	四一
九、	菩提心論の梗概	四二
十、	釋論の大意	四三
第三章 教理		
一、	宇宙の本體	四四
二、	宇宙の現象	四五
三、	三密の修行	四六
四、	眞言宗と女人成佛	四七

五、	信念の發動と其の原則	四七
六、	主觀主義と密教の事相	四八
七、	兩部以外の密教	四九
八、	眞言宗の戒律觀	五〇
第四章 秘趣		
一、	秘密の眞意義	五一
二、	印契の秘趣	五二
三、	本堂の本尊と心内の本尊	五三
四、	慈悲形の佛と忿怒形の佛	五四
五、	現世利益と加持祈禱	五五
六、	眞言の唱へ方	五六
七、	灌頂の法益	五七
八、	金剛界と胎藏界	五八

第五章 信 仰

- 一、眞言宗の安心……………一三四
- 二、白淨信心と菩提心……………一三六
- 三、往生と成佛の關係……………一三三
- 四、我宗の淨土觀……………一三四
- 五、大日如來の御誓願……………一三七
- 六、光明眞言の信仰……………一四〇
- 七、懺悔滅罪の信仰……………一四四
- 八、追善回向の意義……………一四七
- 九、眞言の佛菩薩と多神教及偶像教……………一五二
- 十、現當二世の救濟……………一五五

結 論……………一五九

眞言宗大綱目次 終

眞言宗大綱

蓮 生 觀 善 著



緒 言

眞言宗はこれまで、何事に依らず、秘密々々といつて包み隠して居りました。だが、私はその秘密の扉を押開いて眞言宗の眞實相を皆さんの前に開放しようと思ひます。其のわけは隠すが爲めに却て種々の誤解を招き、或るものは眞言宗を迷信の伏魔殿の如く冒り、或るものは邪解妄斷を下して大師の正統を誤り汚すものあり、かかる傾向を矯め直すには、寧眞相を赤裸々に開放して、その誤解を正だすのが良からうと思ふのであります。

一體眞言宗とは如何なる宗旨であるか、眞言宗の組織體系は如何であるか、

現在の状態はどうなつて居るか、其教理并に歴史及び安心信仰はどうであるか、是等のあらゆる問題を、最も平易に、最も通俗的に述べて、一目の下に概観することが出来る様、御紹介をしたいと思ふのであります。従つて私の之れより述ぶる所は、只だその端緒を開いて、世の眞言宗を未だ全く知らない人に對し、研究の第一歩を踏み出す一資料に供し、一動機たらしめんとするに過ぎないので、専門的に研究する人や、智識階級の人の目には頗る物足らぬ心地がせられるであらうと思ひますが、其の點は豫めお断りを致して置きます。凡べて何等かの問題を取扱ふには、二つの行き方がありまして、一部分に就て狭く深く論ずるか、或ひは全體に亘りて廣く淺く論ずるか、の二つであります。その中、私は後者の方式に依りて諸種の問題を取扱ふ積りであり、ます、最もかういふ平面描寫的の企ては、古來餘り試みられなかつたので、古人の著書を見ましても、多くは部分的の説明か、さもなくば註鈔未釋の類にて、組織的に記述せられたものは殆んどないといつてよい位であります。それには種々の原因事情がありました。眞言宗が古來唯授一人、一子相傳と

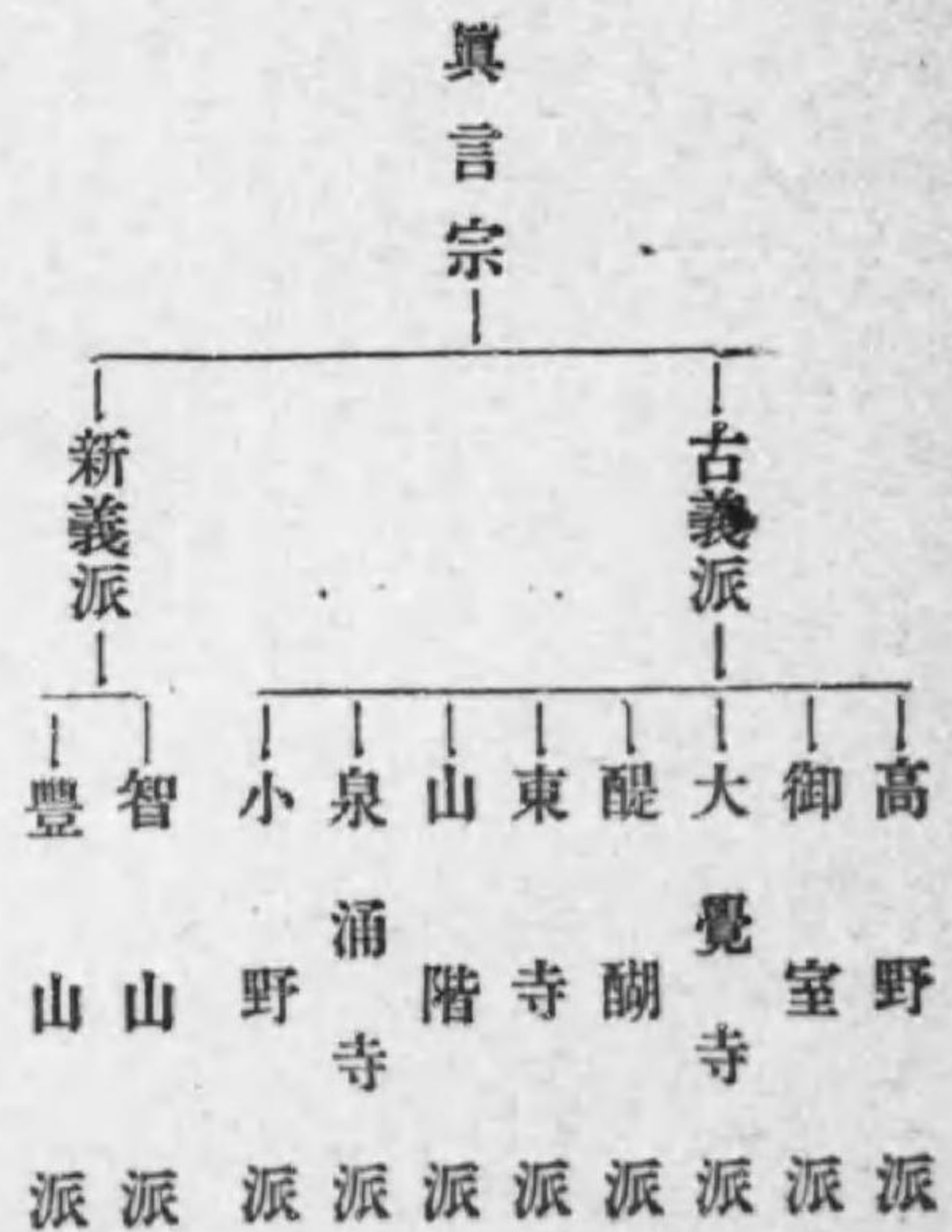
いつた風に、鎖港的風習に囚はれて居たこともその一原因であり、又新義の學風と古義の學風が違ひ、不二門の學說と而二門の學說が異り、事相上の立場と教相上の立場とが變はり、それを統一的に記述することの困難な事情がありたることも一原因であり、又眞言宗の教義は雄大深遠にして、百億契經の粹を抜き、一切の宗教を包括し、すべての學問の最上を極めて居る爲め、知り難く、説き難いと云ふことも一原因であり、其れ此れの事情の爲め、公正なる立場に立ちて、各方面を大觀すると云ふことは至難な事情があつたものと思はれます。併し今日は何に事に依らず民衆化と云ふことが叫ばれ、文學、美術、政治等が皆な一般化され、公開され、解放されやうとするの時に際し、いつ迄も鎖港主義を固持すると云ふことは大勢に逆行するものにて、秘密より開放へと云ふことは世界の趨勢にて、政治でも外交でも、公開を叫ばれて居る位だから、我宗の秘密も差問なき範圍に於て、ある程度までは開放するの良からうと思ふのであります。私は先年「眞言宗要義」と云へる一小冊子を書きましたが、今回はそれと少し違つた方面より眞言宗の大綱を述べ

て見たいと思つて居ます。

第一章 宗 要

一、眞言宗教團の概観

眞言宗現在の制度組織并に宗派關係はどうかとなつて居るかと思ふに、新義派古義派に分れ、東寺派、高野派、豊山派、智山派等十派に分れて居ります。寺院數は各派全體で何程あるかと云ふに、豊山派が三千ヶ寺あり、智山派が三千百ヶ寺あり、高野派が二千四百七十ヶ寺あり、御室派が一千八百八十二ヶ寺あり、醍醐派が九百二十九ヶ寺あり、大覺寺派が五百七十一ヶ寺あり、東寺派が百七十三ヶ寺あり、山階派が百四十八ヶ寺あり、泉涌寺派が四十ヶ寺あり、小野派が三十一ヶ寺あり、是等を合計すると約壹萬二千ヶ寺になります。それが眞言宗全體の寺院數であります。一時は寺院數がだん／＼減少する傾きがありました。現今では漸次増加する傾向があります。それは滿洲、朝鮮、北海道等に新寺が建立されるからであります。此の十派を圖示すれば左の通り



であります。

古義派にては今日古義の名稱を用ゐないことになり、眞言宗聯合各派と稱することになつて居ります。

高野派の本山は高野山金剛峯寺で、之れは高祖大師が嵯峨天皇より弘仁七年に七里四方の境内を拜領し、それ以來前後二十ヶ年の久しき辛酸を経て開創せられた靈山にて、承和二年三月二十一日大師は此の山に御入定あら

せられたのであります。

東寺派の本山は京都の東寺にて教王護國寺とも申します、高祖が密教の根本道場として、唐土より御持ち歸りになりました、三國傳來の大切な寶器寶物は悉く此寺に納められたほどの大切な寺であります。

御室派の本山は京都の仁和寺であります、明治維新の際までは小松宮殿下が住職して居られました、此の寺の創立は光孝天皇が鎮護國家の爲め仁和元年皇城の西北に當る大内山に一寺を建立せんことを發願せられしが、土木の工未だ竣へずして崩御遊ばされたので、宇多天皇はその御遺旨を紹ぎ、遂に仁和四年落慶せられ、勅して大内山仁和寺と號し、代々金枝玉葉の御方々が住職せられたので、門跡と云ふ名稱は仁和寺が嚆矢だと申す事であり

ます。

大覺寺派の本山は京都嵯峨の大覺寺であります、此の寺は嵯峨天皇の離宮であつたのであります、龜山天皇此の寺に住して親しく法務を統べさせられ、又後宇多法皇は此の寺にて四ヶ年間萬機を親裁し給ひ、南北朝御和睦の

際は、後龜山天皇は三種の神器を奉じて此の寺に入御し、父子の禮を以て之れを北朝の後小松天皇に受授せられたる由緒深き寺であります。

醍醐派の本山は京都宇治郡醍醐寺であります、醍醐寺は一山の總名にして山上にあるを上の醍醐と云ひ、山麓にあるを下の醍醐と云ひ、貞觀十六年聖實理源大師の創立せられた寺であります、その後歴代天皇の御歸依深く、永久の頃には醍醐の五門跡として五ヶの大寺を建立せらるゝに至り、高德續出し、事相史上最も關係の深い寺であります。

小野派の本山は京野小野の隨心院であります、此の寺は元曼茶羅寺の別院でありましたが、義範々俊の争ひやら度々の兵燹や兵亂の爲め、曼茶羅寺が荒廢したので、徳川時代増孝師が曼茶羅寺の舊蹟へ隨心院門跡を再興せられたのであります。

山階派の本山は京都山科の勸修寺であります、此の寺は醍醐天皇が御生母の遺志に依り、御建立あらせられたので、歴代の住職は多く皇族を以て繼承し、現に明治維新の際は山階宮晃親王殿下が住職して居らせられたのであ

ります。

泉涌寺派の本山は京都の泉涌寺であります。此の寺は創め法輪寺と稱し、仙遊寺と改め、後俊仍國師が泉涌寺と改められたのである。皇室の御寺として、今尙皇室に深甚の御縁故あることは改めて申す迄もありませんが、元は戒律を主とし、眞言、天台淨土の三宗を兼學して居りましたが、明治維新の際眞言宗専門の本山と改められたのであります。

豊山派の本山は大和の長谷寺であります。此の寺は天武天皇の頃創立せられ、天平五年行基菩薩大導師として開眼供養をせられたと傳へ、其後幾變遷を経て、天正十五年專譽能化此處に晉山せられ、徳を慕ふ者雲集し、教光大に輝き今日の盛榮を見るに至るので、宗務所は東京音羽護國寺内にあります。智山派の本山は京都東山の智積院であります。今の智積院建物は豊公菩提の爲めに八十餘宇を建てられたる其の一つにして、智積院は元根來山にありましたが、天正の兵燹に罹り、根來を逃れ京都北野に法輪を轉じつゝありし玄宥能化は、家康に歸依せられて智山の基礎を確立し、大に教風を宣揚せ

られ、諸傑續出し、今日の隆昌を見るに至つたので、宗務所は東京愛宕町眞福寺内にあります。

二、眞言宗の起原沿革

眞言宗の起原は龍猛菩薩が南天竺の鐵塔を開いた時で、之れが我々人間界に眞言秘密教の弘まりたる發端であります。それ以前の事は多く神秘に屬し、信仰上の問題にて歴史上彼れ此れ申すべき範圍ではないのであります。此の龍猛菩薩は南天竺婆羅門の家に生れ、初めは外道の法術を廣く學び、天文、地理、卜算、醫藥の類まで皆な奥義を究め、次には釋尊の説かれたる百億の契經を研究せられ、或時は自在天に昇り、或時は龍宮海に入りて經典を誦出せられ、後には金粟王の塔下に於て、空中影現の秘密の佛より秘密の法を授かり、至心に修行して遂に悉地を成就し、こゝに大誓願を起し、南天竺の鐵塔を開き、秘密無上の法門を世界に傳へんが爲め、七日の間塔を廻くりて信を凝らし、白芥子七粒を加持して塔門を打ちしに、塔門自然に開け中へ入ることができました。中へ入りて塔内を見るに廣く麗はしきこと云ふばかりな

龍猛菩薩。

間塔の光景

く、大日如來を始め奉り文珠普賢等一切の佛菩薩儼然として羅列し給ひ、微妙莊嚴の光景は筆紙に盡くされない、この時金剛薩埵は親しく龍猛菩薩に秘密の灌頂を授け、秘密の經典を授け、一切の大事を憶持せしめられました、龍猛菩薩はその憶持したる所の秘密の經典等を書寫して我等人間界に弘められたのであります。

龍智菩薩

此の龍智菩薩に龍智菩薩と云へる一人の御弟子がありました、此のお方は南天竺師子國の王子にて、龍猛より秘密の大事を悉く傳へ、眞言の教風を大に五天竺に宣揚せられました、その壽齡七百を過ぎ給へども面容僅かに三十歳ばかりなりと、玄奘三藏は西域記に記るされてあります、此の龍智菩薩に二人の偉い御弟子がありました、一人は善無畏三藏と云ひ、一人は、剛智三藏と申します、善無畏三藏は中天竺摩伽陀國の國王にてましましたのであります、十三歳にて王位に登り、聰明にして大に國民一般の信望を集められました、後故ありて位を兄王子に譲り、龍智の門に入りて、多年修行を積み、五天に其の名聲赫々たるものありしが、龍智の策勵に感奮し、遂に志を決

善無畏三藏

一行阿闍梨

し、駝に秘密の經卷を負はしめ、路を吐蕃に取り、商人隊と俱に唐土傳道の途に向はれました、その時三藏は八十歳にてあらせられたのであります、法の爲めとは申せ勇猛壯烈眞に感激の外はありません、唐土へ着せられたのが開元四年でありました、玄宗皇帝は深く悦び、款待厚遇至らざるなく、國賓の禮を以て遇せられ、大日經七卷その他澤山の梵經を翻譯せられました、その御弟子に一行阿闍梨と云ふ偉い御方がありました、一行阿闍梨の高徳なりしことは、玄宗皇帝が阿闍梨の死を聞かれて、廢朝三日に及び、官費を以て葬儀を行ひ、帝自ら莊重悲愴の碎銘を撰せられたるの一事に見るもその一端を窺ひ知ることが出來ます、次に金剛智三藏は觀世音の靈告に依りて支那布教を思ひ立ち、多くの經卷を携帶し海路を経て唐土に向はれました、然るに海上屢々颶風の危難に遇ひ、三ヶ年を経て開元八年に漸く着せられました、金剛頂經等の澤山の梵本を翻譯せられ、盛に教化の益を施し、在唐二十二年にして七十三歳の御時入寂せられました、その御弟子に不空三藏と云ふ豪いお方がありました、南天竺の生れにて金剛智三藏の入唐と同時に十

金剛智三藏

不空三藏

四歳の時に唐土に來られたのであります、此のお方は三十六歳の時、師匠の遺命に依り、再び天竺に行き龍智菩薩に拜謁し在竺三ヶ年を経て、五天を跋渉し、秘密の梵本五百餘部を携へて唐に歸られました、眞言宗の大切な經典は大部分此の不空三藏の手によりて大成せられたのであります、此の不空三藏の正統を傳へた人が惠果和尚で、其惠果和尚の正統を傳へたのが弘法大師であります、以上八人の御方を眞言宗にては八代高祖と申し、大切に致すのであります。

弘法大師が日本に歸り勅許を得て眞言宗を立教開宗せられてより早や一千百二十餘年になります、その間に變遷沿革をこゝに詳しく述べることは迎もできませんが、その中の重要な出來事の二三を擧げて見まするならば、(一)大師御入定後二三十ヶ年を経て、益信僧都と聖寶僧正との二大高僧が同時に出でられ、聖寶は小野流を開き、益信は廣澤流を開かれたと云ふことは、眞言宗史上重要な出來事の一つであります、(二)聖寶尊師は小野の正統を觀賢僧正に傳へ、僧正は淳祐に傳へ、その後數代を経て義範、範俊の下に至

惠果和尚
弘法大師

日本傳通史

り、小野の六派が分れました、又益信僧都は廣澤の正統を寛平法皇に傳へ、法皇より數代を経て寛助に至り、寛助の門下に多くの高僧一時に出で、廣澤の六派を分派するに至りました、(三)彼様に事相上に大なる波紋を捲き起したる其の波動とでも申しませうか、教相上にも亦た大波紋を捲き起したのであります、それは今を去る五六百年程以前に、賴瑜、聖寶、宥快等の大學者が殆ど同時に出で、宥快師は高野の學風を主張し、聖寶師は東寺派の學風を宣揚し、賴瑜師は新義派の學風を大成せられ、眞言宗の教相は、此の時未曾有の隆盛を極めました、(四)高野山に金剛峯寺派と大傳法院派との二派がありまして、屢々相争ひ覺鑊上人の危難やら、法性、道範等の諸哲が遠流に處せられたやうな事もあり、賴瑜師は之れを見て斷然志を決し、大傳法院と密嚴院の二院を高野山より根來山に移轉せられました、之れが新義派別立の起原で、今より六百二十年程以前の事であります、(五)その後根來山全盛時代が暫く續きました、(六)徳川時代に法住、淨空等の大識見家現はれ、本地説加持説の融和に

力められ、明治維新の際一宗一味の制度が新古の間に成立したのは、法住師等の融和思想に負ふ所が多かつたやうであります。(七)明治十二年より同三十三年まで東寺一管長と云ふ御遺告の大精神に基く制度が二十ヶ年間程續きましたが、三十三年に各山各立を議決し、十本山は個々に分裂して仕舞ひました。併し小派分立は理想的の良制度でないといふ考へは、新古有志の間に今も尙その思想が流れて居るので、御修法を新古合同にて奉修することになつたり、或は又大學を合併しようといふ計畫が起つたりするのは、矢張その思想の片影とも見る事ができます。

三、

立教開宗の主張

立教開宗と云ふことは、新たに一つの宗派を開きて天下に宣布する事を勅許せられるのであるから、相當重大な事でありませう。従つてそれには他の宗派と異りたる特色と、主張と、教理と、信仰とがなければならぬ譯であります。大師は入唐せらるゝ以前より三乗五乘十二部經に疑ひありと仰せられ、煩悶懊惱せらるゝこと九ヶ年の久しきに亘り、遂に入唐して眞言秘密の

蘊奥を極め、即身成佛の大智眼を開きて歸へられたので、大師の御主張には批判的方面と、建設的方面との二方面があります。批判的方面に於ては、眞言宗以外の南都北嶺の諸宗を批判して、その缺點を挙げ、淺劣を難じて眞言宗の優ぐれたる所以を論明せられ、建設的方面に於ては、眞言宗獨特の菩提心を示し、修行法を説き、又眞言獨特の教理并に主張を明かにし、三密の秘法を説き、即身成佛の玄理を論明せられたのであります。其批判的方面の御主張に又た二つの方式を分けられ、一は概括的に批判し、二は分析的に批判せられたのである。概括的批判とは、二教論などの御主張がそれでありませう、古來之れを横の判教といつて居ります。横の判教とは法相宗三論宗、天台宗、花嚴宗、俱舍宗、成實宗等の諸宗を一括して之れを顯教と名け、是等諸宗の缺點と淺劣を指摘せられたのであります。則ちこれらの諸宗は何れも果上の世界や佛の境界の事は説く事ができないと思つて居た、又成佛するには三大僧祇の長時間を経ねばならぬと考へて居た、法身如來は說法せられないものと信じて居た。かういふ大なる謬見を一々説破して、眞言宗は即身成佛を説

き、果上の境地を談じ、法身如來の說法を論證して、顯劣密勝の實義を明かにせられたのであります。殊に又顯教と密教とは、説かれた佛様の御資格が大に違つて居る。顯教は報身、應身の說法なれども、秘密の教法は法身如來の説かれたものであります。既に佛様の御身分や三昧が斯く違つて居る位だから、その説かれた教法の目的も亦た自ら違つて居るのであります。報應二身は隨他の化益を目的とせられ、凡夫相手の御說法であるから、勢ひ方便假設を交へて相手相應にお説きにならざるを得ない。然るに之れに反して法身如來は自受法樂を目的とせらるゝを以て、佛と佛との御話合ひであるから、方便や假設の必要はない。御本懷の丸出しにて、甚深幽玄の極底をその儘にお説きになつてある。従つて顯教は淺くして純眞でない。密教は純眞にして而も深い。かういふのが二教論に於て大師が力説高調せられた横の判教の論法であります。

次に分拆的批判とは、十住心論、寶輪などの御主張がそれであり、古來之れを豎の判教といつて居りました。豎の判教とは大乘と小乘を區別し、權

大乘と實大乘を區別し、世間教と出世間教を區別し、それらを一々詳しく比較研究して長所と短所を互に明かにし、甲に比すれば優ぐれて居れど、乙に比すれば劣つて居ると云ふことを論斷せられたのであります。さて大師はごういふ風、百億契經を分類批判せられてあるかと云ふに、十種の住心に分類せられてあります。左に十住心の圖を掲げること致しませう。

第十住心	眞言宗	密教
第九住心	花嚴宗	
第八住心	天台宗	
第七住心	三論宗	
第六住心	法相宗	顯教
第五住心	緣覺教	
第四住心	聲聞教	
第三住心	天人乘教	
第二住心	迷妄心	
第一住心		

此の十住心は凡夫が佛境界に向つて進み行く階級を主觀的に十種に區別せられ、それに對する宗派をそれ〴〵十種に當て篋めて淺深を互に比較せられたのであります。佛は醫師の如く、病に應じて種々の藥を與へられる。人道主義者の爲には第二の住心の教へを示し、隱遁主義者や悲觀論者の爲には小乗の教へを示し、天上の生活を憧憬するもの、爲には第三の住心の教へを示し、唯心論者には第六の住心を教ふる等、其の相手の思想相應に教へを説いて聞かされる、其の人の爲めには其の教へが一番良いのである。腹痛には腹痛の藥を與へねば、その他の藥はどんな妙藥であつても何んにもならぬが如く、其の人の素養相應、智識相應、信念相應の教法を教ふることが肝要であります。其の意味よりいへば何れの教へも尊い大切な教へであります。併しそれを比較して見るとその中に自ら淺深高下の相違あることを忘れてはなりません。淺いものを深いと思つたり、假りなものを眞實と思つたりする、迷執愛着の心は去らなければならぬ。眞言宗の目より見れば第一の住心より第九の住心に至るまでの教へは、一機一益の教へで一分々々の

功能はあり、それ〴〵の役目は持つて居るけれど、向上の頂天に達したものは云はれない、途中である、修行中の位である、まだ本統の悟りは開けて居ない、第七の人は第七の所が頂上だと思つて居る、第八の人は第八の所が頂上だと思つて居る、けれどそれは迷ひだから改めなければならぬ、人天教よりは小乗の教へが高尙である、けれど法相の唯心論に比すれば大に劣つて居る、小乗よりは法相の唯心論が高尙である、けれど天台の一性成佛に比すれば大に劣つて居る、天台の一性成佛は法相に比すれば高尙である、けれど花嚴の緣起無礙に比すれば大に劣つて居る、花嚴の緣起無礙は天台に比すれば高尙である、けれど第十の秘密教に比すれば大に劣つて居る、第十の秘密教は森羅萬象皆な六大にして、舉一全收、圓融無礙の旨を論じ、即身成佛の深義を明し、我々凡夫の肉體がその儘兩部曼荼羅なることを説くので、前九の住心に居る人々は思ひも及ばぬ境地で、之れが百億契經の最極究竟の奥秘である旨を論明せられたのが、高祖大師の豎の判教であります。

大師は以上述ぶるが如き、堂々たる顯劣密勝の大幟を翻へして、立教開宗

の主張を大獅子吼せられたのであります。それは丁度今より一千百二十年ほど以前のことです。

四、事相教相の二方面

眞言宗を知らんとするものは先づ事相と教相の二方面あることを知らなければなりません。教相は理論の方面で、事相は實行の方面である。教相は教理を説くのを目的とし、六大とか、四曼とか、判教とか云ふやうなことを論ずるのであります。事相は修行の方法を説くのを目的とし、鈴の振り方とか、壇線の引き方とか、護摩の焚き方とか云ふやうなことを教へるのであります。故に二者は不可分の關係を有つて居なければならぬ筈であります。實際はさう行かないので、動ともすれば分離せんとし、背馳せんとするの傾向を有し、現に宗内には此の二つが二大系統、二大潮流を爲して居るのであります。彼の息災増益の祈禱のことを説き、傳法灌頂、結縁灌頂の事を説き、東密台密の區別を論じ、小野廣澤の分派の事などを云云するのは皆な事相門に屬することです。又新義派の學説であるとか、古義派の學説であるとか、

か、一法界主義とか、多法界主義とか、或は而二門の教相とか、不二門の教相とか、本地身方だ加持身方だと云ふやうな問題は皆な教相門に屬することです。あります。此の二大系統が中世分れ々々になつて、教相を研究するものは事相を忘れ、事相を研究するものは教相を忘れ、互に一方に偏して、教相家は事相を學ぶものを無智無學の輩と蔑み、事相家は教相を學ぶものを空談戲論の人と嗤ひ、學教成迷の徒と嘲けるやうになりました。興教大師は痛く之れを慨かれて、一邊を取り一を捨つるは是れ偏執なり、事教の二相は譬へば鳥の双翼の如しと仰せられてあります。つまり教相は事相の原理を説明し、事相は教相の原理の上にて起ちて事作法を行はなければならぬので、若し事相家が教相の原理を忘れるときは、迷信妄信に陥る恐れがあり、又教相家が事相の實修を怠るときは、學教成迷の空論に陥る恐れがあるのであります。故に此の二方面の關係を大切に考慮せなければなりません。さて此の事相教相といふ言葉はどこから出たかと云ふに、大日經疏から出たのであります。大日經の疏に善無畏三藏が教理的方面の事を教相と云ひ、實修的方面の事

を事相と仰せられてある、それが用語の始まりなのであります。その一例を挙げますれば大疏の三に此の行者この衆縁の事相に於て皆な諦信を以て之れを行ふべしと云ひ、又同七卷には、阿字門等は是れ真言の教相なりと仰せられてあるの類であります。事相とは壇を築き、修法の日を選び、供物を献じ、護摩を修する等眼前の事相に就て、直に廣大の佛事を行ふが故に、顯教諸宗にては繁瑣なる作業儀式を排斥し、無念無想に入り、冥想三昧に入り、文字を離れ、心念を離れ、人事を抛棄するを修行の最要とすれども、真言宗にては人事を抛棄せず、人世の日常行爲の上に、佛教の大事を體得せんとするものにて、眼前の事相を離れて別に眞理を悟らんとするは、波を離れて水を得んとすると同様で、人生の事相をその儘に、佛法の大事を體得せんとするのが、真言秘密の教義であります。されば事相と云ふ語は意味深い言葉と云はねばなりません。

所が此の事相に就て深意を知らない門外の人達は、真言宗の事相を妄評して婆羅門教や拜火教の行事と同じ杯だと云ふものがありますが、之れは

真言の事相
と婆羅門教

誠に憫むべきの至りにて、大日如來は末代にかゝる説を爲すものあるべき事を達觀せられ、早く已に大日經の中に之れを懇に戒められてあります。その文を挙げますと、秘密主よ、未來世に於て劣惠無信の衆生は、此くの如くの法を聞いて信受すること能はず、無惠を以ての故に疑惑を増す、彼れ唯だ聞くが如くなるも、堅住して修行せずんば、自ら損じ、他を損ず、是くの如くの言を作さん、彼の諸の外道に是くの如きの法あり、佛の所説にあらずと、彼の無智の人當さに是くの如くの解を作すべしと仰せられてあります。されば真言宗の儀禮作式は教相と事相の兩面より考察しなければ、一方のみを眺めたのでは真言宗の眞意を知ることにはできないのであります。事相教相の二方面を合した所に真言宗の眞面目があるので、所謂教相は花の如く、事相は菓の如く、二者は互に因となり、果となりて、そこに真言秘密の眞生命が躍動するのであります。

五、 信仰上の諸相と本質

真言宗の信仰はどうかと問ふものあらば、或るものは即身成佛だと云ひ、

或るものは三密の秘法を信するにありと云ひ、或るものは凡聖不二を信するにありと云ひ、又或るものは加持祈禱を信するにありと云ひ、或るものは光明眞言を唱ふるにありといふであります。事程左様に眞言宗の信仰が一般の人々に區々に解せられて居るのであります。従つてその信仰の對象本尊につきても、或るものは大日如來を拜し、或るものは阿彌陀佛を念じ、或るものは彌勒菩薩を信じ、又或るものは佛舍利を祭り、或るものは弘法大師を信仰して居ると云ふ風に、十人十種に信仰が違ひ、又時代によりて、彌勒菩薩を信じたる時代あり、觀世音を信じたる時代あり、阿彌陀如來を信じたる時代あり、佛舍利を信じたる時代あり、種々に變遷して居るやうであります。かゝる不統一なる諸相を現出したるに付ては、そこに止むを得ない事情があつたのであります。眞言宗は元來唯授一人と云ふ所に出達して、大日如來より金剛薩埵に傳へ、金剛薩埵より龍猛菩薩に傳へ、それより順次不空に傳へ、不空より惠果に傳へ、惠果より弘法大師に傳へ、一器の水を一器に瀉すが如く、又親より子に傳へ、子より孫に傳へ、玉璽を代々嫡々相ひ傳へるが如く、

唯授一人

餘人には知らしめない、同法同門のものとも雖も堅く秘して見聞せしめない、と云ふやうに嚴秘に付したる爲め、そこに種々の想像と揣摩臆測とが行はれ、一知半解の妄斷を下されたと云ふことは止むを得ない次第であります。そこに有り難味と、尊嚴さが保たれたのであるとも云へますが、それと同時に眞相を誤解し、迷信妄信の付加せられ、添着せられたやうな傾向のあることも、否み難い事實であります。

加持祈禱

加持祈禱は眞言宗の一事相に相違なけれども、之れが眞言宗信仰の本質だとは申されませぬ。方便引進の手段として加持祈禱を行ひ現世利益を縁として信仰の門に入らしめ、下品の悉地より次第に上品の悉地に向上せしむる所に意味があるので、云はゞ之れ手段にして、本質ではないのであります。又大師信仰の傾向に致しましたも、之れを直に眞言宗信仰の本質だとは申されないのであります。大師は御遺告の中に、吾れ白屍の上に人のいたわりを欲するにあらず、密教の壽命を護り繼げて龍華の三庭に開かしむべき謀なりと仰せられてあります。密教の壽命とは云ふまでもなく、佛祖嫡々の

大師信仰

光明眞言

大事にして、その大事こそ真言宗の本統の生命であり、真髓であらねばならぬ。今日大師を尊信し奉るに就ては二つの意味が含まれて居る。一は御生前の御苦勞と御功績を感謝すると云ふことと二は現當二世の御誓願に絶り奉ると云ふことの二つであります。然らば光明眞言の信仰はどうかと云ふに、之れ亦た本質ではないと答へなければならぬ。光明眞言を唱ふるは口稱の功力を縁として、淨土往生を願ふ爲めに、眞言念誦の信心は下根劣機の安心である、一密息ることなくば、増上縁の力にて、三密双修、即身成佛と云へる大理想、大精神より云へば、遙かに驅け放れて居ると云はねばなりませぬ。勿論光明眞言を唱へることも大切であり、大師を信仰することも大切であり、又加持祈禱も大切であります。けれど眞言宗の理想精神は今一つその奥にあると云ふことを忘れてはならないのであります。然らば其の今一つその奥にあると云ふものは何んであるかと云ふに、それは不二の大事であります。大師が遙々御入唐遊ばされたのも不二の大事を傳へんが爲めでありました。大

不二の大事

師御誓願の御言葉にも、三世十方の諸佛我れに不二を示し給へと誓願せられたる旨を記されてあります。その不二とは兩部不二の大事であり、心身不二の大事であり、凡聖不二の大事であります。大師は此の不二の妙法を傳へんが爲めに入唐せられ、此の不二の妙法を弘めんが爲めに開宗せられたので、眞言宗の教義信仰は此の不二の大理想の上に打ち建てられ、不二の根柢より種々の枝葉花葉が咲き出で、居るといつてよいのであります。

六、眞言宗の研究法

眞言宗の教義信仰を手取早く知るには、如何なる書物を繙くべきや、と云ふやうな質問に屢接することがあるが、眞言宗の教義信仰は書物のみにては知ることができない、師に就て習はなければどうしても眞趣は解せられない、弘法大師ほどの御方でさへ、久米の塔下に大日經を感得したけれど、之れを開き見るに衆情滯りありて解することができない、經文の意味がどうにも判らない、そこで遂に唐に渡り惠果和尚に従つて教授を受けられたのであります。であるから古徳も眞言の法門は秘奥隱密にして十地の菩薩も

容易に窺ひ知ることが出来ないと云はれてあります、なせかと云へば、秘密の經論には梵字や眞言多羅尼が所々に挿入されてあり、又亂脱とて、殊更らに文字や章句を上下に顛倒してある場合が往々あり、又精神上の現象を客觀的の事に寄せて、擬人化し、具體化して説いたやうな場合がたんとあり、表示や象徴に依つて、秘密の深旨を説いた場合が多いからであります。

さて是等の呼吸が判り、眞言宗特有の讀書法が分ればどの經典を見てもすぐ判るかと思ふに、さうは往かない。大日經を讀めば本不生の理は判る、けれど眞言宗の全體は判りません、釋論を見れば不二の妙理は判れども、眞言宗の組織は判りません、即身義を繕いても、菩提心論を讀んでも皆なその通りであります。是等の經論を綜合して始めて眞言宗の大精神を窺ひ知ることができるのであります、なせ眞言宗の教義信仰はそんなに六ヶしいのかと云ふに、眞言宗は事相と教相の二大部分より構成されて居るから、教相の方面のみでも判らない、事相の方面のみでも分らない、それを合はして見なければ眞の秘趣は味はれない、眞言の教義は如何なる問題に對しても常に

兩面の考察

兩面より眺めることを忘れないのであります、實在を論ずる時でも現象を忘れない、現象を論ずるときでも實在を忘れない、又精神を説く時にも物質を忘れず、物質を云ふ時にも精神を忘れず、香を供へ、花を擎けるにも、其の儀式と、其精神との兩面を忘れない、その關係を而二不二と云ふのである、而二不二とは二つなれども而も一つであり、一つのやうなれども而も二つである、と云ふので、此の幽遠なる思想を以て一切の事象を説明するのであるから、二と二を合して四になると云ふやうに簡短には扱へないのであります、殊に事相方面の事は多く秘密に付せられ、よしある程度まで秘密を開放されるにしても、尙且つ矢張師授を待たねは判らぬことが多いのであります、併し只だ難ヶしいといつて居ても仕方がないから、研究すべき書物を見出さねばならぬ、弘法大師は三學錄の中に吾等の學ぶべき經論を列舉せられ、先づ經部に於て大日經、金剛頂經等二百三十卷ほどを列ねてあり、律部に於て蘇悉地經等百七十卷ほどを列ねてあり、雜部に於て守護經等百三十卷ほどを列ねてあり、悉曇部に於て梵字胎藏儀軌等四十卷ほど列ねてあり、論部

眞言宗の研究書

に於て菩提心論、釋論等十一卷を列ねてあります。これらを一々ここに研究する事は到底不可能のことであり、研究の順序を云へば先づ本書を再讀三讀して、眞言宗の大要を知り、次に弘法大師の撰述せられた十卷章等を研究し次に大日經の疏を研究し、進んで五部の秘經及び秘密儀軌に基く野澤諸派の事相上の奥秘を究めるようにせねばなりません。彼の呪禁鈔やト筮書や、四目錄などが眞言宗の秘書かと思ふものあらば、それは飛んでもない大間違ひであります。古來眞言宗の宗學の範圍を先づ大體二十五卷章と定められてあります。二十五卷章さへ研究すれば大體の筋道は判ると云ふことになつて居る。その二十五卷章とは即身義、聲字義等の十卷章と、釋論十卷と、大日經疏の前五卷とであります。以下少しく眞言宗聖典の重なるものにつきその梗概を述べる事に致ませう。

第二章 聖典

一、大日經の梗概

大日經、金剛頂經を兩部の大經と稱し、秘密の精要深旨は皆な悉く此の二經の中に含まれて居るといつてよいので、此の二經は大日如來が金剛法界宮并に眞言宮殿に於て説かれたのであります。其の中先づ大日經の梗概を申しますれば、大日經は七卷ありまして、開元十三年善無畏三藏が玄宗皇帝の勅命を奉じ、福光寺に於て譯せられたのであります。高祖大師が久米の塔下に感得せられたのは此のお經であります。その内容は三十六品に分れて居り、住心品、眞言品、息障品、普通眞言藏品、世間成就品、成就悉地品、字輪品、曼荼羅法品、曼荼羅位品、八印品、供儀式品、持誦法則品、瑜伽勝義品、眞言事業品等であつてその中住心品が一經の主眼になつて居ります。住心品は人間の精神が信仰もなく、道徳もない低級な所より、漸次向上して、萬徳圓滿の佛果の位に至る次第を説き、阿字本不生論に入り、更らに人生觀となり、宇宙觀となり、

秘密教の極致を盡し、成佛の本源を究めてあるのであります。故に第二品以下は住心品の敷衍とも見ることができ、又成佛の修行法を説き、實踐的方面を細説せられたものとも見ることができるのであります。此の大日經に三本の不同がありました。一は法爾常恒の經と云ひ、大日如來が諸佛菩薩と俱に無始無終に説いて居らるゝ法爾常恒の法曼荼羅であります。二は分流の廣本と云ひ、龍猛菩薩が南天竺の鐵塔に入り、親しく金剛薩埵より授傳し佛の加持力によりて臆持して忘れない、その法爾の經の精要を採つて十萬頌と爲し、人間界に傳へられたのであります。之れを常に十萬頌の廣本と云ふのであります。三は略本と云ひ、三百卷にも餘るほどの十萬頌の廣本を龍猛菩薩が更らにその肝心を略出して三千餘頌とせられたので、今日傳つて居る七卷の解は此の略本と云ふ分であります。十萬頌の廣本は漢語に翻譯されて居りませぬ、けれど、その中の要所々々を抄出せられたる數多の經軌は、善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏等のお力によりてたと翻譯せられて居るのであります。殊に善無畏三藏は一行阿闍梨の爲めに、廣本の精神を以て、

此の七卷の大日經を縱横に講義せられまして、それを一行禪師が筆記せられたのが、彼の有名なる大日經の疏であります。二十卷の大冊にて、廣本の深義や、材料や、肝要な點は殆んど疏の中に盡されて居るといへるのであります。大日經の經題は詳しく云へば大毘盧遮那成佛神變加持經と申すべきを常には略して大日經と稱して居ります。此の大日經一部の大精神は前にも一言した通り、我等の胸中に五智四身の德、一つも缺くることなく、本來圓滿して具有せる旨を説き、その本來具、有せる佛德を、圖に描きて開示せられたのが、胎藏界の曼荼羅で、恰も母の胎内に胎兒を藏せるが如く、吾等凡夫の胸中に三覺圓滿の佛陀と寸分變らぬ萬德を具有せる旨を説かれたのであります。故に大日經を胎藏の法門と申します。金剛頂經の方は金剛部の法門と稱し、三密の修行によりて我等の本來具有せる佛陀の靈德を發揮する方面を主として説かれてあるから、兩部は本有と修生の兩面であります。甲は固有の方面を説き、乙は修行の方面を説く、けれど、此の兩面は異なるに似て而ももと々々一體なのであります。故に之れを兩部不二と云ふのであり

ます。

二、金剛頂經の梗概

金剛頂經は金剛界の法門を説いたので、金剛界の曼荼羅は、此の金剛頂經によりて圖示せられたのであります。此の金剛頂經に四種の不同がありまして、一は法爾常恒の本と云ひ、法身如來が常恒に説き給ふ所の經である。二は無量頌の廣本と云ひ、金剛薩埵が如來の教勅を受けて、法爾常恒の經本を諸經の例に準じ、五成就を加へ、端なきに端を設け、之れを結集して、自ら護持し、南天の鐵塔内に機縁を待つて居られたのであります。此の經本の厚さは五旬にも餘るほどあり、無量頌にして廣博なれば、凡夫の人力を以ては見聞受持することができない、そこで永へに鐵塔内に秘藏せられて、此の土に傳へられなかつたのであります。三は十萬頌の大本と云ひ、龍猛菩薩が鐵塔より誦出せられた十萬頌の經卷であります。大日經にも十萬頌の經あり、金剛頂經にも十萬頌の經あり、之れを、兩部二十萬頌の大經と申します。四は略本と云ひ、大本の肝心の點を略出して四千頌とせられたのであります。右之通り

四種の不同あれど何れも日本へは傳はつて居ないのであります。僅かに第四の略本の一部が翻譯せられて居るに過ぎないのであります。金剛頂經全體の構造は左の通り十八會に分れて居ります。

- 初 會 攝大乘現證大教王は阿迦尼吒天にて説き
- 二 會 一切の教集瑜伽は法界宮殿にて説き
- 三 會 一切如來秘密瑜伽は法界宮殿にて説き
- 四 會 降三世金剛瑜伽は須彌盧頂にて説き
- 五 會 世出出金剛瑜伽は波羅陀國にて説き
- 六 會 大樂不空瑜伽は他化自在天にて説き
- 七 會 普賢瑜伽は普賢菩薩宮殿にて説き
- 八 會 勝初瑜伽は普賢宮殿にて説き
- 九 會 一切佛集會瑜伽は眞言宮殿にて説き
- 十 會 大三摩耶瑜伽は法界宮殿にて説き
- 十一會 大乘現證瑜伽は阿迦尼吒天にて説き

- 十二會 三昧耶最勝瑜伽は法界菩提場にて説き
- 十三會 大三昧耶眞言瑜伽は金剛曼荼羅道場にて説き
- 十四會 如來三昧耶瑜伽は金剛曼荼羅道場にて説き
- 十五會 秘密集會瑜伽は秘密所にて説き
- 十六會 無二平等瑜伽は法界宮にて説き
- 十七會 如虛空瑜伽は實際宮殿にて説き
- 十八會 金剛法冠瑜伽は第四淨慮天にて説く

右第一會の中に四大品ありその第一金剛界品に大曼荼羅、陀羅尼曼荼羅、微細曼荼羅、供養羯磨曼荼羅、四印曼荼羅、一印曼荼羅の六種の曼荼羅を説き。第二降三世品の中に十種の曼荼羅を説いてある。初の六は金剛界品と同じく、後の四つは教勅大曼荼羅、教勅三摩耶曼荼羅、教勅法曼荼羅、教勅羯磨曼荼羅の四曼荼羅である。第三遍調伏品には六種の曼荼羅を説き。第四一切義成就品にも六種曼荼羅を説いてあります。彼の金剛智三藏の譯せられたる畧出念誦經四卷は初會の四大品を畧出したものであり、不空三藏の譯せられた

る教王經の如きは初會四大品中の金剛界品の一部分を譯出したものであり、施護三藏の譯せられたる三十卷の教王經は初會の四大品を全部譯せられたものであり、又不空三藏の譯せられたる般若理趣經は第六會の大安樂不空三摩耶眞實瑜伽品の一部を譯したものであり、宋の法賢三藏の譯せられたる七卷の大教王經も矢張此の第六會の一部を譯せられたものであります。

之れによりて之れを見れば金剛頂經は十八會の中第一會と第六會のみしか譯されて居ない譯で、未完結の經卷のやうであります。が、併し肝要の義趣は畧出經、教王經等に畧盡されて居るのであります。のみならず諸種の儀軌並に金剛頂義決等の中に要旨を網羅されて居るのであります。特に義決は金剛智三藏が四千頌の廣本の深旨と材料とを以て、縦横に金剛部に關する大切な事を不空三藏に口授せられ、不空三藏が周到犀利なる筆を以て、それを筆記せられたものにて、恰も大日經に於ける一行の疏と同様に金剛頂經に關する大切な書物であります。大日經の精粹は疏によりて宣明せら

れ、金剛頂經の要諦は義決によりて明かにせられてある、けれど無畏三藏は三論を深く學ばれた思想が底の方に光りて、大日經疏の説述に際し、多少その色彩を帯びて居ると云はれ、金剛智三藏は法相唯識の造詣深かりし爲め、その傾向が義決の上にきらめいて居ると云ふものがあります。それが爲めでもありませんまいが、兩部の間に一法界と多法界との二大思想の傾向を生ずるに至れるは注意すべきことであります。それは兎もあれ、兩部は不離であつて金剛界と胎藏界は不二であります、理智色心は本來不二にして、不二を離れて兩部なく兩部の外に不二を立てない、之れが大師の正統正傳であります。天台の所傳は兩部を而二とし、兩部の外に蘇悉地を立て、之れを不二の極位と致します、之れは真言宗の正統宗義と大に違つて居るのであります。

三、即身義の大意

大師以前にも成佛と云ふことは説いて居りましたが、併しそれは三大僧祇の長い々々修行を要するといつて居たのであります。心の成佛は説いて

居りました、けれども身の成佛は説かれなかつたのであります、のみならず五性各別といふやうな説さへ唱へられて居たのであります、そこへ大師が突如として即身成佛を叫ばれたものでありますから、各宗の人々は實に青天の霹靂の如く、自らの耳を疑ふほどに驚いたのであります、その結果大師の唱ふる即身成佛は邪説だ、妄論だと罵り騒いだのであります。そこで大師は二經一論八個の證文を擧げて、即身成佛の原理を説述せられ、邪説でも、臆説でもない、それが佛教の本統の秘奥極底だ、と云ふ事を論明せられたのが、此の即身成佛義一卷であります。清凉宗論の後に造られたのだと云ふ説があります、が、さうかも知れないと思ひます。本書の内容は六大緣起論と、四種曼荼羅と、三密修行との三大の關係を秘密的見地より論明して即身成佛の原理を明かにせられたのであります。尙巨細の幽旨は加藤精神僧正の深遠博大なる御講述に依り詳知せられんことを希望します。

四、聲字義の大意

此の書は三密の中の語密の深旨を説いたものであります、顯教諸宗には

聲は無常なりと云ひ、或は聲は月を指す指の如しなどいつて音聲文字を輕視するの風があります、然るに眞言宗は聲字即實相と云ひ、言語即眞實といつて、極めて之れを重要視するのであります。釋論に如義眞實語といつたのは、大師の聲字即實相の事であり、大師が聲字即實相と云はれたのは、眞言宗の宗名が眞言であるから、その眞言の意味を釋せられたのであります。眞言とは方便假説を交へないと云ふことであつて、顯教諸宗は隨機方便の説なるを以て如義語の説とはいはれない、眞言實言とはいはれない、密教の法門は大日如來自受法樂の爲めに説き給へる所なるを以て方便不實の語は一言半句もない、一々の文字皆な法性を詮顯し、一々の音聲悉く法身の説法である、一切の言語文字は直に是れ法性の本體にして、法性の外に言語文字なく、言語文字の外に法性の體なく、維摩經に言説文字は皆な解脱の相なりとあるはそのことであり、大師が實相は聲字に依て顯はると仰せられたのもそのことであります。顯教では言語文字は一種の符號に過ぎないと考へますから、聲字は假にして理に及ばずと説き、絶對の靈界は言語を以て説くこ

とはできない、文字を以て書くこともできない、と云ふのであります。然るに密教では言語文字を神聖なものと考へますから、一字に千理を含むと説き、文々句々皆な神秘を宿すと説き、絶對の妙境は不洗練なる雜語を以ては説くことができない、けれど靈人の靈語を以てし、神人の神語を以てすれば、自由を書くこともでき、語ることもできると説くのであります。熱情の籠もつた言葉には泣かされたり笑はされたりします、洗練された文字には天地鬼神を感動せしむるの力が籠もつて居ります、一首の和歌で人の命を助けたと云ひ、一編の文章で萬衆を奮起せしめた、と云ふのは聲字と實相の不可分の關係あることを思はしむるもので、可愛らしい子供が居るといへば、そこに子供の姿が浮んで見へるやうに思ひ、そこに毛虫が居ると云へば、氣味悪いむづ痒さを感じ、美人と云ひ、善人と云へば快感を覺へ、醜婦と云ひ、惡人と云へば不快を覺へる、これその言葉に實體を詮顯せしめ、浮ひ出さしむる功用があるからで、言語は實相と相ひ離れない關係があるといふ事は日常の事に顧みても直に首肯されることだと思ひます。大師は聲字義に六塵悉く

文字なりと説き、十界に言語を具すと仰せられました、嗚呼何んと云ふ深遠な言葉でありませうか、實にその通りです、其の通りです、宇宙萬有には皆な神秘の囁きがあります、谷川の水の流れにも法身の説法があり、磯打つ波の音にも、蜂吹く松風にも、神秘の囁きが宿つて居る、吾等はそれを聞き分ける心眼が開けて居ないのである、古池に蛙の飛び込む音を聞いて宇宙の妙機に觸れた人もあり、又曉の明星を見て朗然として大悟せられた人もある、聞く人には聞へ、見る人には見へるのであります。

尙此の聲字義と即身義と叫字義とは互に内容が關聯して居るので、昔より之れを三部の書と申します、即身義は身密を説き、聲字義は語密を説き、叫字義は意密を説いたとせられてあります。三密を三冊に分けて書かれたのだと云ふのであります、なるほどさういつて見ればさういふ風にも見られます。但し叫字義を意密とすることは少し解し難いやうであります、けれど、梵字の叫と云ふ字は菩提心の種子であり、第六識の種子であり、金剛薩埵の種子である、と云ふ義邊より意密とせられたのであります。此の三部の書は

何時頃の御製作かと云ふに、ごうもはつきり判りませぬ、秘鍵とか、法花の開題などには年月を載せてあれど、今の三部の書には年月が記載されてありません。但し三書御著作の順序は、即身義が初めで、それから聲字義を作り、それから叫字義を書かれたものであらうと思はれます。聲字義が即身義より後の御著作だと云ふことには幾多の文證が見出されるのであります。

五、叫字義の大意

此の書は叫の一字に萬徳を含み、無量の深義を該攝する旨を説かれたのであります。大日經には阿字の大切な事を説き、金剛頂經には叫字の大切な事を説いてあります、その叫字の字體を分拆すれば阿訶汗塵の四字となる、その四字を更らに八種旋轉、十六立門等によりて、字相字義の幽旨を説き、以て叫字の廣大無邊なる旨を論述せられたのであります。只だ見れば何んのわけもなき一個の文字なれども、一たび秘密の意を以て此の文字を開眼して見るときは、叫の一字に千萬無量の深義を含藏して居るので、之れを開けば八萬四千の法門並に無量の教義皆な此の叫字より流れ出たので末を攝

して本に歸すれば、見聞覺知の境界、顯密一切の諸教、悉く吽の一字に結歸するとも云へるのであります。吽字は金剛薩埵の種子にして、阿字は大日如來の種子であります。ゆゑに阿吽の二字は我宗にて種々なる意味にて、種々に重要視するのであります。吽字は薩埵因徳の種子にして、阿字は大日果徳の種子である、されば因に依て果を成し、果の極は還つて因徳に歸するを以て、凡即是佛、生佛不二の理を開示せられたものとも考へられるのであります。かういへば吽字は尊い文字はないと云ふ事になります。が、併し吽字ばかりが尊いのではない、その他の一切の文字も皆な悉く尊いのであります。秘密の意を以て見れば、梵字の摩多體文は申すに及はず、いろは歌も、五十音も悉く皆な一々に法界を該攝し、萬徳を含藏して居るのであります。一毛孔に須彌山を容れると云ひます、一微塵に兩部の徳を藏すと云ひます、されば經に一々の文字皆な金色の佛となりて現はるとあるのは、決して修辭や形容ではないのであります。本書はその中且く吽字の一字に就て形音義の深義を闡明せられたのであります。

六、二教論の大意

眞言宗の判教に二種の方式ある中、二教論は横の判教を説き、寶鑰は豎の判教を説ける旨、前章に一言した通りであります。が、尙その盡さざる所を少しく述べることにしませう。二教論は顯教と密教の勝劣比較を唯一の目的として論議せられてあります。が、寶鑰は判教よりも寧ろ行者の菩提心向上の順序を説く方が主のやうであります。二教論は始めから終りまで判教を唯一の目的として論せられてあります。二教論は上下二卷ありまして、御撰述の年月ははつきり判りませんが、即身義及び十住心論などより後の御著作にて、天長年間の作かとも考へられます。が、それも確證はないのであります。判教と云ふ事は各宗ともに説きます。が、小乗には判教と云ふものがありませぬ、只だ大乘は非佛説だと云ふのみで、勝劣を比較せんとするの勇氣はないのであります。大乘以上の諸宗は何れも判教を立て、居ります。先づ法相宗は有空中の三時教を立て、一代の諸教を判し、三論宗は心境俱有宗と、心有境空宗と、心境俱空宗との三段に分ちて無所得の中道を主張し、天台宗は

四教五時を以て一代教を批判し、華嚴宗は小乘、始教、終教、頓教、圓教の五教に分つて諸教を簡別してあります。是等は大師以前の宗派でありますが、大師以後に開宗せられたる淨土宗、眞宗、禪宗、日蓮宗等にもそれ／＼判教がありまして、淨土宗には聖道門、淨土門の二門を分つて佛教諸宗を比較し、眞宗には二雙四重と云ふ頗る複雑なる判教の方式を愚禿鈔に詳しく説いてあり、禪宗には教内教外の二門を立て、教外別傳不立文字を主張し、日蓮宗には本門迹門の二門を分ちて上行菩薩再誕の本懷を高唱するのであります。此くの如く何れも立教開宗につきては、自宗の特色を宣明するを一大要件として居るのであります。

さて二教論に現はれたる顯密對辨の主なる論點はどうかと云ふに、第一の論點は能説の佛身に就て顯密二教の優劣を論せられてあります。それは所説の教法の淺深は能説の佛身の尊卑に依るからであります。而して顯教の教法は凡へて應化身報身の説いたものであるが、密教の法門は法身如來が親しく説かれたのであります。第二の論點は法身の説法と云ふ事に就て

顯密の淺深を論せられたのであります。顯教にては法身佛は説法をせられない、音聲もなく、形相もなく、唯た無形の眞理を法身といつたに過ぎないと云ふのであります。然るに密教にては音聲もあり、形相もあり、説法もあり、現に兩部の大經並に秘密一切の經軌をお説きになつてあると云ふのであります。第三の論點は佛境界に對する見解の相違であります。顯教にては佛果の境界は言斷心滅無相空寂にして、その狀況は説くことも、慮ることも出来ないと云ひますが、密教にてはそれは未熟な修業中の人に就ていふことにて、悟りを開ける人の爲には、悟りの世界相應の言語並に心慮を以て、靈界の實相を説くことも、語ることもできるとしてその經證をたんと擧げられております。第四の論點は成佛の遲速と云ふことであります。顯教にては三大僧祇の長い間六度萬行の修行の功を積まねば成佛はできないのみならずその中間に於て幾度も進んだり退いたりすると云ふのであります。然るに密教にては三密不思議の加持力に依りて、一念一時一生の間に無上眞實の佛位に登ることができると云ふのであります。是等の論點に就て六經三論を

引證して、顯劣密勝の主張を論明せられたのが此の二教論の大意であります。

七寶鑰の大意

寶鑰三卷と十住心論十卷とは廣畧の違ひにて、思想並に論法、組織、材料等は全體同一であります。最初十住心論を作りて陛下に奉呈せられしに今少し簡短なものをと望ませられたので、更らに寶鑰三卷を撰して再び奏進せられたと云ひ傳へられて居ります。淳和帝の御代に諸宗へ詔を下して章疏を造進せしめられたことがある、護命僧正の研神章などもその時造進せられたと傳へ、大師の寶鑰もその時撰述せられたのだと云ふ説があります。さて此の寶鑰一部の大體の構想は、世間出世間の一切の教法に對して、淺きより深きに至る十種の階級を分ち、それを一々批判せられてあるので、先づ第一の住心は三毒五欲に耽溺して姪欲と食欲のみしか知らない、善惡因果の道理も知らない、惡事のみを行つて居る階級のものであります。第二の住心は我慢我欲の心が幾分減して、己れを節して人に施し、博愛慈善の人道を知

るやうになつた階級のものであります。第三の住心は人間世界の苦惱を厭ひ、天上の樂みを欣び諸天に歸依し、三界二十八天の樂所に生れ、暫く三惡道の苦患を離るゝ階級の人であります。第四の住心は人生のあらゆる苦みは煩惱並に業惑の力に依るのであるから、生死輪廻の苦惱を脱せんとするに無我の理を悟らねばならぬ、無我の理を悟るには無我に一致する戒定慧の三學を修行して、煩惱の業を滅盡し生死界を解脱し、早く空寂の涅槃に入らねばならぬと力め勵む階級の人であります。第五の住心は惑業苦の三道に依りて六道に輪廻するのである、と云ふことを痛感し、その惑業苦を分解して十二因縁とし、その十二因縁を順逆種々に觀察し、攻究して迷ひ出るのはどう譯だ、業を作るのはどういふ譯だ、それを滅除するにはどうすればよいと云ふ事を悉して、終に生死の根本たる三道を斷除して有餘無餘の二涅槃を得るを目的とするのであります。有餘涅槃とは惑業を除き去りたれと心身はまだ生きて居るのである。無餘涅槃とは惑業を除き去ると共に心身も亦た悉く死滅し去りて空寂の境地に入るのであります。第六の住心

は唯識唯心の理を諦觀して森羅萬象は凡へて唯心所變なりと悟り、煩惱障と所知障とを除き去りて、靈界の風光を觀るの人であります。第七の住心は八迷の戲論を除きて、八不中道の悟眼を開き、心源空寂の解脫境に至る位の人であります。第八の住心は三諦の妙理を觀念し、我等の一念に三千の妙法を開顯し、寂光淨土の佛の靈徳と一致する位の人であります。第九の住心は事々無碍圓融の深理を諦觀し、一塵の中に法界があり、一毛孔の中に大千世界を包容するの玄理を體驗する位の人であります。第十の住心は大日如來の御心と我等の一心とが一致し、我等の身口意と大日如來の身口意とが一致し、乳と水と解け合ふが如く妙融した時に、我等胸奥の秘密莊嚴藏の花の園、忽ちに開けて、即身成佛の大果を圓滿する底の人であります。

此の十ヶの住心に就て三つの眺め方があります。一は顯密合論の十住心と見るのであります。則ち此の十住心は、大師御在世の當時流布して居た各宗の教理は勿論、孔子、老子、婆羅門教等に至るまで、苟も大師の耳目に映じたる、あらゆる教法は悉く拉し來つて、それを淺深十種の階級に分類せられ、批判

せられたのであるから、前九の住心は顯教であり、第十は密教であり、之れを九顯一密と云ひ、又は顯密合論の十住心とも云ふのであります。二は眞言行者が修行の功を積み、信念の向上する状態を十階に區畫せられたものと解するのであります。住心とは心の状態と云ふ事にて、我々の精神状態を十種に區別せられたのであります。十住心の思想は大日經の六無畏の思想を根據として、着想せられたやうであります。が、彼の六無畏は行者の菩提心の上進する次第順序の模様を示されたものでありますから、十住心には判教的方面も含まれて居りますけれども、又修行昇進の状態を説かれたものとも見るべき理由があるのであります。三は曼荼羅界會の諸佛菩薩の内證法門を十種に開きて示されたものと解するのであります。大日經に五種の三味道と云ふものを説かれてあり、その思想が此の寶鑰の上に顯はれて居るのであります。則ち第十の住心は佛地の三味道であり、第七八九の住心は菩薩の三味道であり、第五の住心は緣覺の三味道であり、第四の住心は聲聞の三味道であり、第一二三の住心は世間の三味道であります。此様に眺める時は十

住心は大日如來の普門の萬徳を開顯せられたものとも見る事ができるのであります。右三様の眺め方によりて十住心の趣旨並に色彩が變つて見える譯であります。

八、秘鍵の大意

此の秘鍵は般若心經を講述せられたもので、本書を撰述せられた年代並に因由に就ては卷末の上表の文が何によりも明白であります。弘仁九年の春疫病が大層流行いたし、陛下もひどく宸襟を惱ませられ、御宸翰を染め、紺紙金泥の般若心經を書寫して佛天に供養し、以て疫病の平癒を御祈念あらせられたる際、大師は勅命に依り、その心經を講讀せられたのであります。所が疫病の流行が忽に止んだと申すことであります。その御宸翰の心經は今尙勅封の心經と稱し、嵯峨の大覺寺に納つて在ります。今日病人などの爲めに年秘鍵と稱し、病人の年齢の數丈秘鍵を繰り返へして讀誦するの風あるは、此の因縁に依るのであります。尤も此の上表の文に就て近代の學者の間に僞作ではないかと云ふ疑ひを挾むものがあります。それは智山の運敬、高

野の雲石堂、讃岐の三等阿闍梨等であり、併し頼瑜宥快等の先徳學匠の間にはそんな問題はなく、皆な眞作として疫病祈禱の別因縁を信じられて居たやうであります。此の心經に就ては十二三種の異つた譯本があります。が、嵯峨天皇の寫されたのは羅什三藏の譯された經で、大師も此の經に就て講義せられたのであります。大師以前の人々は皆な心經は大般若經の肝要の點を略出せられたものだとして居りましたが、大師はそれと違つて般若菩薩の内心眞言を説かれた經だと解せられたのであります。なせ大師は左様に解せられたかと云ふに、それは青龍寺惠果和尚の御口説に依り、又鷲峰の親聞に依つて、その深旨を開示せられたのであります。ですから此の秘鍵は鷲峰親聞の幽旨を述べられたる寶典にて、大師は心經を五段に分つてその深旨を述べられてあります。第一の人法惣通分に於ては普門の教機を擧げて、因行證入の關係を論じ、第二の分別諸乘分には諸乘の差別の相を説きて一門の内證を述べ、第三の行人得益分には前の諸乘行人の得益を示し、第四の惣歸持明分には散説を持明に歸して般若に依て菩提心を成滿する

旨を明し、第五の秘藏眞言分には前段所説の惣別一切の功德は皆な悉く般若菩薩の大心眞言の具徳なることを説かれたのであります。されば經題の心の字は經文の中のギャテイギャテイの眞言を指したので、一經の眼目は彼の眞言にあるのであります。従つて陀羅尼集經の第三の卷並に六度經等にも共にギャテイギャテイの眞言は般若菩薩の大心眞言だと仰せられてあります。心經の大旨趣は此の眞言を説くにあることは明白であります。經題の心の字は經文の中の眞言を指したのだと云ふことは、當だに大師の達見なるのみならず、羅什三藏の譯せられたる別本の心經にも、摩訶般若波羅密多大神咒經と題して心の字を大神咒と稱せられてあります。

さて此の心經は顯の經なりや秘密の教なりやと云ふに就て、古來兩説あります。一説には心經は顯の經である、併し秘鍵は秘密眼を以て開會して秘密的に釋せられたものだとし申します。その理由は心經は生身の釋尊が説かれたのである、又翻譯者が秘密傳持の人でない、又説いた場所が秘密の會所でない、又高祖の三學錄に載せられてない、故に心經は顯の經だと云ふので

あります。之れに反して一説には心經は密經であると云ひます。その説に依りますと三學錄に載せてなくとも十一面の儀軌などのやうに秘密の經軌は他にたんとある、又秘密の會所でなくとも波羅奈國や須彌盧頂などで説いた秘密の經もある、又譯者は秘密の人でなくとも尊勝多羅尼經のやうに顯人の譯した秘密の經はある、又大師が般若經の略本だと仰せられたのは顯家の釋に準せられたもので大師の御本意でないことは明白であると云ふのであります。そして東寺派高野派の學者は俱に此の般若心經は雜部の密經だと云ふのであります。併し秘鍵に就ては東寺、高野の兩派間に少し違ひがあります。東寺派は五分の中前四分を顯とし、第五の眞言分を密とし、而もその秘密を顯が中の秘とするのであります。高野派は五分ともに密教とし、秘が中の極秘とするのであります。此の心經を雜部の密教と解するに就て、雜部の密教とは如何なるものなりや、と云ふことをこゝに述べべきであります。それは下に至り題を改めて説くことに致しませう。

九、菩提心論の梗概

此の菩提心論は眞言宗にて大切なる書物として、承和の官符並に弘仁の官符にも載せられてあります。大師は釋論と共に大切なる眞言宗所依の論藏として、唐より傳來せられたのであります。然るに此の書の作者に就て異論がありまして、天台宗の智證大師は五個の理由を擧げて龍猛菩薩の作でない、不空三藏の作だと主張せられてあります。併し我宗にては既に卷頭に龍猛菩薩造とあり、又貞元錄などにも龍猛菩薩造とあるを以て龍猛菩薩の御作に違ひないと信するのであります。それは兎もあれ、大師が此の書を大切にせられたる理由は顯密二教の差別淺深を明白に批判せられてあるからであり、又佛道修行の根本たる菩提心の事を詳説せられてあるからであり、又即身成佛の正因たる三摩地の菩提心を説いてあるからであります。菩提心の大切なることは佛敎各宗の通談にて、菩提心は實に佛果の本體、萬行の根本であります。法相宗には菩提心に就て十門を建て、華嚴宗には心體と心相と心徳の三種を開き、心體の中にまた廣中略の三種ありと云ひ、廣く云へば無量無邊の菩提心あり、中には十種の菩提心あり、略すれば眞心、深心、大

悲心の三種の菩提心ありといつてあります。眞言宗には勝義心、行願心、三摩地心の三種の菩提心を説くのであります。喩へて云へば菩提心は種子を下すが如く、萬行は樹根を培養するが如く、佛果は莖葉花果のやうなものである。之れを大日經には因根、究竟の三句に分けてあります。因根、究竟の三句は即ち菩提心の始と中と終とを區切つて見たものであります。人若し菩提心を起さずして佛果を得んとするならば、それは種子を蒔かずして花果を得んとするに異らないのであります。であるから顯密大小の諸宗ともに菩提心を大切に説くのであります。

さて此の書には菩提心をどんな風に説いてあるかと云ふに、勝義、行願、三摩地の三種の菩提心を説いてあるのであります。三摩地の菩提心とは三摩地は梵語にて定と譯し、又は等持とも譯します。我々が精神を統一して餘念なく本尊と行者と一致する境地を定と云ひ、又行者は本尊の功德を感受し、本尊は又行者の功德を納受して、行者と本尊とが融合するを等持と云ふのであります。高祖は三摩地とは五部の秘觀、三密の妙行なりと仰せられてあ

る、之れは則ち三部五部の佛菩薩の三昧に入りて、餘念なく三密の妙行を修し、凡身即佛の秘觀を凝らすと云ふこととあります。次に勝義心と行願心の二心は自證、化他の二作用であり、大智と大悲の二用であります。勝義心とは般若の智慧を以て善惡邪正を判別し、勝劣淺深を了別し、九種住心の無自性なることを知り、顯教諸宗の淺劣なることを知りて、その劣を捨て、眞言秘密の境地に向つて向上し進轉する精神を勝義の菩提心と云ふのであります。行願心とは同體大悲の心を起して、衆生を利益し、衆生をして安樂ならしむる様化他の爲めに努力する、美しい心であります。則ち菩提心が慈悲博愛の方面に動いたのが行願心であり、菩提心が勇猛精進の心を起し、向上奮闘の心を起したのが勝義心であり、菩提心が三密瑜伽の三昧に向つたのが三摩地の菩提心であります。三種の菩提心は一心の上の三種の作用にして、勝義心と行願心は上求の心と下化の心との二心であります。此の三種の菩提心は實に眞言宗特有の菩提心であります。

所が高祖大師は此の三種の菩提心の外に別に一つの信心を加へて四種

にせられてあります。それは戒の序に説ける信心と大悲心と勝義心と大菩提心であります。又三業十帖義には更らに五種の菩提心を明されてある、一は發菩提心、二は修菩提心、三は明心、四は出到菩提心、五は無上菩提心であります。併し是等の三種四種五種の異りは全く開合の不同にて内容を能く窺つて見ると矢張り當論の三種の菩提心の外はないといつてよいのであります。それから今一つ此の菩提心に就て重大なる問題がある、それは戒律と此の菩提心との關係であります。戒律には顯教の戒律あり、密教の戒律あり、種々の戒法があります。が、之れを結歸すれば淨菩提心戒の一つに歸着するのであります。あらゆる戒律は皆な淨菩提心を戒體とするので、高祖大師は之れを淨菩提心戒と名づけられ、善無畏三藏は三世無障智戒と仰せられてあります。此の戒律の事に就ては下に至りて重ねてお話を致ませう。

十、釋論の大意

釋論は龍猛菩薩の作られた書物にて、十卷ほどのものであります。秘密の意を以て馬鳴菩薩の作られた起信論を解釋せられたものにて、佛教論藏中

稀れに見る傑作であります。その組織的の才能と云ひ、批判的眼光の犀利なる所と云ひ、高祖大師が特に之れを三學錄の中に眞言所學の論藏として御撰定になつたのは所以ある哉と思はれます。その内容は因縁分と、立義分と、解釋分と、修行信心分と、勸修利益分との五段に分ち、大乘の信念を起さしむべきことを論せられてあるので、邪定聚の人をして信心を起さしめ、不定聚の人をして不退轉を得せしめ、正定聚の人をして不二の果海に契はしめんとするのが一論の大趣意であります。そしてその五分を貫くに不二門と、眞如門と、生滅門との三門を建て、更らに三十三種の摩訶衍を開きて因分果分を分ち、顯教密教の勝劣を批判せられてあるのであります。則ち前三十二種の摩訶衍は修行種因海の位にして、無明の位地であり、迷ひの位地であり、顯教の分齊である、之れに反して第三十三の不二摩訶衍は性徳圓滿海の位にして、覺りの位地であり、明の位地であり、密教の分齊であるので、大師は此の釋論を以て顯密對辨の依憑とせられたのであります。尤も此の釋論は龍猛菩薩の眞作でない後人の僞作だと云ふやうな説を唱へる人があります。傳

教大師などもその論者の一人であります。尙此の釋論は大師が始めて日本へ傳られたのではなく、大師以前に已に戒明和尚が請來せられてあつたのであります。故に大師は御請來錄に此の釋論を載せられてありません。それは恰も大日經が大師以前に己に傳つて居たから御請來錄に入れてないのと同様であります。

釋論とは略稱にて詳しく云へば釋摩訶衍論と云ふべきであります。そして摩訶衍とは梵語にて大乘と譯します。されば大乘を釋する論と云ふことになリます。その大乘の言葉は何にを意味するか、の解釋によりて此の論の目的が違つて參ります。或る人は大乘起信論を釋する論と云ふ意味だと云ひ、或る人は大乘佛教の大理想を解釋する論と云ふ意味だと云ひ、又或る人は不二摩訶衍を釋するの論と云ふ意味だと云ひ、種々の解釋があります。何れにしても起信論の五分、三細、六麁を秘密眼を以て秘密的に眼精を入れられたものにて、その思想の幽遠なることと云ひ、その眼識の博大なることと云ひ、贊歎の言葉を見出すことができないほどであります。姚興皇帝は親し

く本書の序文を作られ、その中に釋摩訶衍論はこれ乃ち性海の源を窮むる密藏、行因の本をつくす淵詞なり、兩曜の面圓かに臨み、群星の目具さにひらけたり、江河の水澄淨にして、大海のなみ泰然たり、朕未だ詳かにするに及ばざるに金輪を坤の上に出し、妙高を掌の内に入ると賛歎せられ、又本論の由来を叙して朕聞くその梵本は先きより中天竺に在り、使を遣はして近ごろ東界に至る、弘始三年九月上日を以て、大莊嚴寺に於て、親しく筆削を受け、敬つて斯の論を譯す、翻譯せし人は後提摩多三藏、俗語を傳ふる人は劉連陀等、執筆の人は謝賢金等なり、首尾二年にして方に功を畢ると云ひ、更らに論旨の雄大なることを賛して、細なる哉大なる哉、翰牘稱を絶し、縁を離れ、語れば則ち淨名朕を呵し、談すれば則ち善吉朕を叱せんと序せられてあります。

第三章 教理

一、宇宙の本體

宇宙の本體は地水火風空識の六つであります。宇宙萬有は皆な此の六大

から出來て居るので、六大が一切萬物の本體である、と云ふのが、真言宗の宇宙觀であります。此の六大緣起の理を始めて唱へ出したのは弘法大師であります、それ以前の御祖師様ははつきりその事を言明されて居なかつたのであります、尤もその思想は大日經などにも現はれて居り、又八祖相承の頌文と稱する六大無碍常瑜伽等の八句の文にも現はれて居りますが、それを明確に組織して立論せられたのは弘法大師の即身義であります。此の六大無碍の原理は、あらゆる思想の洗練され、研究された、進歩の極致に達した思想であります。初め婆羅門教には神我の變造を立て、居りましたが、それが一步進みて小乗の業感緣起の思想となり、更らに進みて法相宗の賴耶緣起の思想となり、更らに進みて真如緣起の思想となり、法界緣起の思想となり、最後に六大緣起の思想に到達したのであります。併し六大と云ふことは真言宗に限らず、原始佛教の經論にも説いてある、俱舍論や婆娑論などにも、或ひは四大を説き、或は六大を説いてあります、けれど真言宗の六大とはその意味が大變違つて居るのであります、その違つて居る點を一二申して見る

ならば、小乗では吾人の感覺に觸れる範圍内のものを水大火大といつて居るので、彼の流れて居る水とか、燃へて居る火とかを宇宙の根本本體だと云ふのでありますが、眞言宗の六大は堅、濕、煖、動、無碍、了別等を云ふので、科學上の水素とか、酸素とかに比すべきものであります。吾人の感覺を超越したる所のエーテルとか、電氣磁氣と云ふやうなものが化合し積集する所に無碍の理法が行はれて居ると云ふのであります。それから又小乗の四大は建築の材料を此處彼處に置いてあるやうに、精神や物質や水大や火大がごろごろとその邊に散亂して居て、それが因縁の力に因て、或は合し、或は離散すると考へたのであります。眞言宗の六大はごろ／＼と散亂して居ると云ふやうには考へないので、その六つのものが間斷なく活動して居る、絶へず無碍して居ると考へるのであります。六大が各自別存して、地大の外に水大があり、水大の外に火大があり、物質の外に精神があり、精神の外に物質がある、と云ふやうに考へては、物心一如にはなりません。色心不二とは云はれませんが、六大はコーラスの如きものです。數人の樂人が相寄りてコーラスの組を

作つて居るやうなものと考へるのであります。それから又發智論、婆娑論等に依ると地水火風空識の六大は有漏隨増の六界と云ふことになつて居りますが、眞言宗にはその六大を法性無漏の靈體とし、兩部不二の大日如來と開顯するのであります。是等の點が小乗の六大と違つて居るのであります。されど六大の思想は早く既に原始佛敎に依りて唱へられて居たのであります。それが種々に研究され、工風され、洗練されて、遂に仕舞に元の六大説に立ち歸つて來たのであります。喩へて云へば佛様になるにはどうすればよいか、その原料種子は何れにありや、と尋ね／＼して、山越へ、谷越へ、川越へ、到頭仕舞に自分の心の内にあることを知つたやうなものであります。小乗佛敎には初め二つの思想の流れがありました。一つは業感緣記の思想で、他は法體恒有の思想であります。それが段々發達して一方には眞如緣起となり、他方には唯心論となつたので、眞言宗の六大無碍はそれらの思想を統一して、物心二元の圓融となり、六大緣起の思想となつたのであります。此の六大中の地水火風の四つは物質であり、第六の識大は心である、そして第五の空

大は物心の二つを無碍せしめる役目を有つて居る、宇宙萬有の本體は此の六大無碍の原理によりて始めて宣明せられたので、科學上の六十餘の元素は此の無碍せる六大を分折したものと考へられ、眞理の極致は空寂にして、音もなく、香もなく、色もないと考へて居た眞如の理も、六大無碍の大智眼を開いて見れば意外にもそこに、音もあり、色もあり、香もあり、而して大なる活動が行はれて居ると云ふことが分りまして、死物に等しいと思つて居た實在が六大説に開眼せらるゝことによりて忽ち活潑々地の法身如來となつて現はれたのであります。

二、宇宙の現象

宇宙のあらゆる現象を四つに分類して、それを大師は四種曼荼羅と名付けられました、六大が縁起して現はれた現象を宗教的に信仰的に四種に分けられたのであります、一は大曼荼羅と云ひ、之れは身體の色相に就て名けたので、佛様のお姿や、木像や、畫像などを云ふのであります、廣い意味で云へば凡ての人類や、凡ての動物までも悉く大曼荼羅と云ふことができます、二は

三摩耶曼荼羅と云ひ、之れは器物象徴に名けたので、佛菩薩の持つて居らせらるゝ蓮花、寶珠、錫杖、刀劍等の標幟を云ふのであります、三摩耶とは本誓と云ふことで、佛菩薩が蓮花を持つて居らるゝは本誓を表示して居られるのであり、手に印を結んで居らるゝはその印相應の本誓を表示して居られるのであります、廣い意味より云へば一切の日常用ふる器物道具より山川草木に至るまで皆な三摩耶曼荼羅と云ふことができます、三は法曼荼羅と云ひ、之れは名稱や、文字や、記號に名けたので、經典であるとか、佛様の種子眞言であるとか、佛菩薩の名號であるとか、云ふやうなものであります、文字は思想を表はし、或は理解し、説明する所の法則規準となるから法といつたので、廣い意味にて云へば、あらゆる書物や、世界各國の文字や、言語や、符號は悉く法曼荼羅と云ふことができますのであります、四は羯磨曼荼羅と云ひ、起居動作及び威儀事業等を云ふので、佛菩薩が衆生教化の爲めに種々御活動あらせらるゝ一切の動作をいつたのであります、羯磨とは梵語にて威儀事業と云ふことであります、廣い意味にて云へば吾々のあらゆる動作

行爲は悉く皆羯磨曼荼羅と云ふことができるのであります。右の四曼は身體と、器物と、名稱と、作用とを信仰上より分けたものにて、佛菩薩に四曼を具して居らるゝのみならず吾人にも此の四曼を具して居るのである。否な吾々のみならず、動物にも、植物にも、無機物にも、悉く四曼を具して居るのであります。四曼とは一體の上の四種の現象にて、四種各別に獨存するのではなく、大曼荼羅は惣體で他の三曼荼羅はその上の別作用であります。假りに不動明王に就て云へば、火生三昧に入り給へる畫木像は大曼荼羅で、劍索を持つて居られる所が三摩耶曼荼羅であり、結跏趺座して居られる所が羯磨曼荼羅であり、慈救咒、火界咒等が法曼荼羅であります。之れを大師は四曼各不離と仰せられました。最も此の各不離と云ふ言葉には重々深い意味があつて、自分の四曼と他人の四曼と不離だと云ふ意もあり、佛の四曼と吾々の四曼と不離だと云ふ意も含まれて居り、宇宙萬有の現象界の種々相は此の四種曼荼羅各不離の一句に盡くされて居るといつてよいのであります。

三、三密の修行

身の行ひを正しくし、口の言葉を清くし、意の思念を善くして、身口意の三つを純淨ならしめ、眞善ならしめ、身の惡作惡行を慎み、口の妄語惡口を禁止し、意の邪念邪思惟を排除して、漸次向上修養するのを三業の修行と云ひ、三密加持と云ふのであります。吾々凡夫より云へば三業であるが、佛様より云へば三密と云ふことになる。なせなれば三業の修行が段々上達すれば、そこに不思議の作用を發揮するに至り、凡人の窺ひ知ることのできない妙用を現はすからであります。經に六神通と云ふ事を説いてある、他心通、天眼通、天耳通と云ふやうな通力自在が得られると云ふのであります。他心通とは他人の胸中を看破するので、今日の讀心術のやうなものであり、天眼通とは此處に居りながら千里の外の出來事を見るのであり、天耳通とは此處に在りて遠い彼方の囁きまでを自由に聞くので、今日の無線電話のもつとく、進歩したやうなものであり、かういふ六種の通力が羅漢さん以上になれば自在に得られると云ふのであります。眞言宗の三秘密はそれらよりも、もつと深くして、且つ廣いのであります。口業に就て云へば四無碍辨に自在を得る

のである。意業に就て云へば細妄執、極細妄執の極々微細な煩悩までもすつかり除くことができ、根本の無明を斷滅して、心天に明月を見るのである。身業に就て云へば姪欲食欲の耽溺より逃れ、三毒の鐵鎖を解き放ち、人我と法我の束縛を脱し、起居動作に眞の自在を得るのである。かうなれば自然にそこに偉大の力を體得し、神秘の妙用を現はすやうになつてくる。大師は眞言は福を受け妄語は日夜に苦を受くと仰せられました。一寸聞くと形容詞か、何んかのやうに思はれるが、能く噛み締めて見るとそこに思ひ當ることがある。浮世の世渡りの上にも正直で嘘を云はない人は自然に他に信用され、尊敬され、商人なれば商賣が繁昌して、懐工合がだん／＼よくなり、福の神が舞ひ込んでくる。之に反して妄語虚言を吐くものは世間の人に瓜彈きせられ信用が地に落ち、榮達の途が塞がれ、日夜に苦みを受けねばならぬやうになる。我宗に眞言陀羅尼を平素念誦することを勧めるのは、そこに深い意味があるのであります。

三密とは口に眞言を唱へ、手に印を結び、心三摩地に住し、散亂の心を静め

て、一心に本尊を念じ奉ればその三業が互に加持して、不思議の悉地を得る、と云ふのが三密加持の利益であります。口に眞言を唱へると云ふことは嘘を云はぬ修行である、手に印を結ぶと云ふことは身體の動作を慎みて悪事を犯さぬと云ふことであり、意に本尊を念ずるは悪い邪な思ひを起さぬと云ふことであります。そして心に悪念が起らぬやうになれば、口にも嘘偽りを云はぬやうになり、身にも悪事を犯さぬやうになる、それと同様に行爲や言葉が正しくなれば、心も自然正しく清められることになります。之れを三密の相互加持と云ふのであります。此の三密を身口意と云つたのは、人間に就ていつたからで、廣い意味より云へば、手に印を結び、口に眞言を唱へるのみに限らない、一切の音響は皆な口業である、松吹く風の音も、碇打つ波の音も、語密と云ふことができるのである。又一切の精神的現象は皆な意業である、石が轉ぶのも、水が流れるのも、皆なそれ相應の意思を以て轉んで居り、流れて居るので、之れを意密と云ふことができるのであります。六大無碍の大理想より云へば、身口意の三業は我々人類のみに限らない、草木にも、鐵

物にも、皆な動作あり、音響あり、意思あるを以て三業三密を具へて居ると云ふことがいへる。草木成佛はこの原理より出達するのであります。

四、眞言宗と女人成佛

女人は五障三従の罪深くして、成佛することができない、と顯教諸宗には説きます。けれど、眞言宗には女人の成佛のみならず、草木成佛までもできると説くのであります。尤も顯教にも龍女成佛と云ふことがありますが、あれは變成男子といつて、男子に生れ變つて成佛したので、女人の儘で成佛したのではありません。花嚴經の十地品には初地にて永く女人の身を離ると説き、法花經には女人は梵天になることができな、帝釋天になることができな、輪王になれない、佛になれないと説いてあります。然るに眞言宗には父母所生、身速證大覺位と説きまして、若しは男子でありても、若しは女人でありても、血肉所成の此の身、此の儘にて、成佛ができると説くのであります。大日經には男女等しく菩提の益を被ると説き、弘法大師は信修するときには男女を論せず、皆な其人なりと仰せられ、興教大師は造惡の男女も定めて極樂

に生すと仰せられてあります。此の成佛に就て未來成佛、主觀成佛、現身成佛の異りがありまして、未來成佛とは死後淨土へ往生して、然る後徐に成佛するのであり、主觀成佛とは心の成佛にて、是心是佛と云ひ、即心頓覺と云ふやうなのがそれであり、現身成佛とは即身成佛の事にて、身も、心も、そつくり其儘佛に成るので、他宗には未來成佛を説くか、主觀成佛を説くか、然らざれば三却成佛を説くのであります。が、眞言宗には即時に、即身に即座に成佛すると説くのであります。此の現身成佛に理具の即身成佛、加持の即身成佛、顯得の即身成佛の三種の即身成佛を説いてあります。が、それは兎に角に、此の即身成佛と云ふ事は弘法大師が日本に於て始めて唱へられたのであります。大師以前にも成佛と云ふことは説きましたが、それは主觀成佛、未來成佛にて、現身成佛ではなかつたのであります。大師以後に至りましては、だん／＼即身成佛を説く宗旨が出来て参りまして、日蓮宗などには法力、信心、佛力の三力が合體するときには、即身成佛ができると説き、禪宗などにも即身即佛を説くやうになりました。

所が某宗の祖師は眞言宗の即身成佛は男子のみに限りて女子には通用しないのである、その證據には高野山に女人の登山を大師が禁制せられた一事に徴するも明かである、と云ひました、が、之れは實に曲解も甚だしい僻説であります、然るに、今日尙そんな口吻を眞似て誠らしく説くものがありますから、一言こゝに序ながらその妄を辨じて置きませう、眞言宗の即身成佛は男女を論せず、老若を擇ばず、三密瑜伽の加持に浴する時は如何なるものも皆な成佛ができるのであります、現に曼荼羅會上には女人の佛様がたんと居られるのを見ても分ります、金剛歌菩薩、金剛舞菩薩、金剛愛菩薩等、定門の佛様はいづれも皆な女形であります、女子に通用せぬとは思ひも寄らぬことにて、嘗たに男女の區別を論せないのみならず、草木國土までも成佛ができる、と説くのであります、なせと云へば何れも皆な六大法性の大靈の現はれにて、吾等も大靈の一分であり、女人も大靈の一分であり、草木も、禽獸も皆大靈の一分であり、萬象は悉く同根同體であるからであります、大師が女人の高野登山を禁せられたのは末弟子の修行を思はれての事にて、高野

山開創の目的は嵯峨天皇に奉りたる上表の文にもある如く、末弟子の修行道場を建てたいと云ふ思召から出たので、男僧修行の道場に女人の出入を禁せられたのは當然の事にて、恰も今日の男子の學校に女人の出入を禁じ、又女子の學校に男子の出入を禁ずると同一であります、東寺や高雄山に女人の參拜を禁せられずして、單に高野山のみ女人の登山を禁せられたのは全く右の理由に基くものであります、それから今一つは當時一般の風習として、女人の高山に登ることを忌み嫌ふ風があつたと云ふことにて、彼の大峰山、金剛山、富士山等の如き何れも女人の登山を禁制せられておりました、が、その理由を推察するに、女人の體質上峻嶒なる高山に登るは危嶮なりと考へたること、女人の登山には不祥なる事故が多いと考へたこと、靈山の神聖を保持する爲には女人の登山を禁制すべしと考へたこと、日本民族は神代の昔より潔癖性に富み、特に女子の産褥經水等を非常に忌み嫌ふの習慣ありたること、是等の思想が絡み合つて、女人を禁制せらるゝに至つたもので、高野山は大師が始めて禁制せられたと云ふよりも、大師以前より登山

を禁制せられてあつたと解すべき理由があるのであります。それはまア何れにしても、大師が女人の教化を疎かにせず、女人の教化に力められたことは、甲山の如意尼御教化の因縁の如き、又檀林皇后に灌頂を授け給へるが如き、阿波切幡寺建立の因縁の如き、又女人高野を開きて女人の結縁を謀り給へるが如き、御一代の御事績に徴するも明かであります。彼の如意尼は、もと眞井御前と稱し、天稟の麗質玉を伸へたるが如く、世にも稀れなる美人にて、淳和天皇の殊寵を蒙り、皇妃たりしが、嵯峨帝、淳和帝、及び皇后等大師より灌頂を受けさせらるゝ由を聞き、眞井もその入檀を請ひ、如意輪觀世音を投花し、信心肝に銘し、靈告に感激し、遂に侍女二人と俱に禁裡を逃れ、武庫の山中に入り、草庵を結び、勅許を得て大師の御弟子となり、信仰三昧に入られ、その他皇后、后妃、皇子等の灌頂授戒を受けられたる方方が多いのであります。されば眞言宗の教義は女人の教化、女人の成佛を拒まないのみならず、之れを教義上より見るも、之れを曼荼羅建立の宗義に鑑みるも、男女は對等平等にして、何等其間に區別を設けない所に、眞言宗の眞理趣と眞面目が窺はれる

のであります。

五、信念の發動と其の原則

信念の起るには人々それ〴〵違つた動機があり、又信念の強弱淺深には一定の原則があります。信念の起るには善知識の教化に感激して信仰の門に入るあり、自分が病患災害に遭つたのが動機となつて信仰の門に入れるあり、或は妻子に死に別れて信念の起れるあり、温かき信仰心とか、燃ゆるやうな信念とか、云ふ事を能く申しますけれど、その發動の動機に就きては人々皆變つて居ります。醍醐天皇は御代嗣なきことを深く憂へ、聖寶尊師に求兒の法を修せしめられ、その効驗に依り朱雀天皇、村上天皇の兩帝相ひ次で生れさせられ、それがため三帝ともに深く佛法を叙信あらせられたと傳へ、紫式部はその娘小式部が天死したのが縁となりて信仰の門に入つたと云ひ、四國靈場の衛門三郎は冥罰に戦慄して信仰の門に入つたと云ひ、その動機は一様ではありませんが、兎に角何等かの刺戟に依りて信仰の門に入ることの出來た人は幸福であります。その刺戟がよし如何に苦しくとも、信仰を

得た喜びと仕合せに比すれば天地も雷だならぬほどに信仰は尊いものであります。所がその信仰を得た人の中にも、白熱的の人と、微温的の人と、淺深厚薄が種々に違ひます。釋尊は五十二の階級ありと仰せられ、我が眞言宗には修業者の素養と資格に就て九種の區別を分け、十三種の差異を別けられてあります。今それを大別すれば二つに分けることができます。一は上根で、二は下根であります。その上根と下根は何にを標準に區別するかと云ふに五ヶの條件があります。一は信仰心の深いものと淺いものとの違ひであり、二は精進心の強いものと弱いものとの違ひであり、三は正念の清いものと濁つたものとの違ひであり、四は禪定心の堅いものと柔いものとの違ひであり、五は智慧の聰明なものとの鈍劣なものとの違ひであります。此の五ヶの條件の優秀なものは上根と云ひ、劣等なものは下根と云ふので、その二者の違ひに依りて修行の仕方も變はり、又修行の結果も當然非常の差異あることは云ふまでもありません。上根のものは素養、資格、實力が優ぐれて居るから速に不二の深旨を理解することができ、三密瑜伽の修行を爲すことができ

きますから、直に即身成佛することができ、之れに反して下根のものは素養、資格、能力が劣つて居るから、不二の深旨を理解することができず、三密の妙行を修することができない、そこで一密口稱の修行を積み、淨土に往生して聞法教化の利益により、二生三生の後に成佛する外はないのであります。

然らば上根下根の違ひは何に因りてできたかと云ふに、それは三世因果の理法に依り、宿世の業力に因るのであります。前世に善根功德を多く積んだものは此の世に上根の人と生れ、前世に悪作悪業を行つたものは此の世に下根の人と生れるのであります。例へば勉強した人は學者となり、怠けたものは無學に終るやうなものであります。但し前世といつても一生や二生のことではなく、生々世々の長い間に積み重ねたる善惡の業力に依るので、一聞十悟のものあり、一聞一悟のものあり、十聞一悟のものあり、人の資性は實に千差萬別であります。釋迦如來は娑婆往來八千度と仰せられました。釋尊はそれほど長い間御修養を積まれたのであります。そ

こで真言宗には宿善と云ふ事を大切に説くのであります。宿善開發の時至れるものは、恰も三月頃の櫻の花のやうに、正に開くべき内容準備がちやんと調つて居るから、秘密灌頂の道場に入り、大阿闍梨より醍醐の法雨に浴する時は、忽ちに五智四身の徳花が開け、即身成佛ができるのであります。が、之れに反して萩や桔梗は春風吹けども開きません、矢張秋冷の氣候にふれなければ、内容の準備が調つて居ないから、咲かぬのと同様に、機縁相應と云ふ事が最も大切なのであります。かといつて安閑と手を拱いて時機のくるのを待つて居るべきではない、自ら進んでその機運を開拓しなければなりません。せぬけれども又猪突妄進は功を成す所以ではないのであります。こゝに於て真言宗には機縁建立と云ふ事が宗學上六ヶしい一つの問題になつて居りました。三密の修行を修すればどんな人でも即身成佛が出来る、と云ふ譯には往かないのであります。上根上智の人でなければ即身成佛は出来ないのである、なせと云へば下根のものでは三密を修しても本統の三密瑜伽が調はないからであります。そこで淨嚴和尚は上根上智の人とは高祖覺鑊上人

等の人は是れなりといつてあります。さうすれば吾々は先づ下根下智のものと思はなければならぬ、けれど決して落膽するには及ばない、大勇猛心を起して向上精進すれば百年の黒闇も一時に照破することができ、我等の迷ひの雲霧も秘密教益の増上縁の力によりて、やがて密嚴花藏の風光を見ることができるやうになります。

六、主觀主義と密教の事相

宗教には儀式を排して主觀主義に重もきを置くものと、儀式に重もきを置きて主觀を輕視するものがあります。真言宗はその中何れに屬するかと云へば、主觀に偏せず、儀禮に流れず、二者を平等に重んずる宗教であります。之れを人に就いて云へば行儀と心懸けとはどちらも大切で、行儀がよければ心懸けはどうでもよいとは云はれず、又心懸けがよければ行儀はどうでもよいとも云はれない。真言宗には行軌を重んじ、儀禮を重んじ、本尊を祭り、方位を擇び、日時を擇び、土地を擇び、造壇の法を説き、或ひは護摩を焚き、或ひは六器を供へる等、儀禮事相を重んずる宗派であることは一見して明か

であるけれどこれらの儀禮が眞言宗の信仰の全體では決してないのであります。然るに此の儀式的方面を眺めて世間種々に批難するものがある。或るものは無宗教的立場より儀式作法は皆な迷信だと嘲けり、或るもの主觀主義的立場より虚禮だ虚儀だと嘗るのである。前者は食はず嫌ひの人であるから深く論ずるに足らぬが、後者に對しては一言するの必要がある。眞言宗の儀禮中には時代の傾向に相應しないやうな點がないとは云はれない。その點は勿論改めなければならぬ。悪い點や、弊害の點は改めなければならぬが、その所以を以て事相上の儀禮を全然否定せんとするものあらばそれは大なる謬見と云はねばならぬ。宗教には多いか少いか、必ず儀式を要するので、全く儀式を用ひない宗教は殆んどないといつてよい。最も儀禮を極端に排斥する宗教がないではない。基督教中のユニテリアンなどはその一例である。殊に甚だしいのはクエーカー宗で、彼の宗には寺院もなく、僧侶もなく、一定の儀式もなく、音楽も用ひず、禮拜壇も設けないのである。けれど儀式が丸切りにないかと云へばさうではない。日曜には必ず信者が會合して、説教せ

んとするものは立ちて説教を爲し、祈禱せんとするものは立ちて祈禱を爲す、かういふ程度の儀式はあります。又佛教中の禪宗は儀式を極端に排斥する方にて、不立文字と稱し、經卷も、佛像も焼棄するほどの勢ひであります。が、それでも丸切り儀式を排斥すると云ふ譯には往かないので、現に接心であるとか、江湖會であるとか、提唱であるとか、棒喝であるとか、種々複雑なる種類の儀式があります。又眞宗などの人々は動もすれば加持祈禱や事相上の儀禮を極端に迷信呼ばはり致しますが、之は精神主義の痼疾に陥つて居るので、採るに足らぬ空論であります。殊に初心の行者や劣機のものにはどうしても事相上の儀禮を假らねば眞の信仰の門に入ることは六ヶしいのであります。信は莊嚴よりと云ふのはそのことで、秘密の儀式には淺深重々の意味が含まれて居ります。大日經には有相無相と云ふ事を説かれてある、その有相無相の關係を説くに二種の思想があります。一は有相より無相へ進むので、我等が本尊を祭り、供物を備へ、印を結び、眞言を誦して三密を修行するときは諸佛の加被によりて三昧の中に佛菩薩が影現せられ、不思議の瑞

相を感見することができ、その時それを嬉しいと思ひ、有り難いと思つて、そこに停滞してはならない、それを幻の如きものだ、夢の如きものだ、陽焰の如きものだ、と觀念して有相の執着を打破しなければならぬと云ふのであります。之れを遮情門と云ひます。惠果和尚は譬へを擧げて鏡を磨く時少しく影像を現するを見て留まる時は遂に實の鏡を成することができないやうなものだと仰せられました。二は無相より有相へ進むので、密印品に身分の舉動はまさに知るべし、是れ密印なり、舌相に轉ずる所の言説はまさに知るべし、皆な是れ眞言なりと仰せられてあります。我等日常の行爲も考へ方によりては一舉手一投足に深い、意味があり、一言一句の言葉にも天地に通ずる力があることを思へば、秘密眼の前にはあらゆる事物が皆なその儘に法身如來の全體となり、一本の花にも、一柱の香にも、盡十方の功德がこもり、一本の指にも、一尊の印にも、法界を擧ぐるの威力が籠つて居るのであります。之れを表徳門の實義と云ひます。眞言宗に事相儀禮を重んずるのは主觀的意味を忘れて虚禮に流れるものでない、一々の行事に深い秘密の聖

旨を吹き込み事相を透うして、即事而眞の神秘を體驗せしめんとするものであります。

七、 兩部以外の密教

眞言密教の宗要は金剛部胎藏部の經典に盡くされて居りますが、兩部の外に別に特種の人々に對し、特種の法を説いた、秘密の經典があります。それは國王の爲めに鎮護國家の法を説いた仁王經の如き、六波羅蜜の行法を説いた六度經の如き、或は降雨の法を説いた請雨經の如き、或は吉日良辰の撰擇法を説いた宿曜經の如きは兩部理智の秘密を説いたものでない、特種の人爲めに、特種の目的を以て、特種の法を説かれたので、純粹の密教とは少し區別して考へなければならぬのであります。従つて大師も三學錄の中に是等の經典を兩部の外に別に掲載せられてあります。兩部の經は理智不二を眼目としてあります、が、是等の經は必ずしも理智不二を眼目とはしないのであります。又兩部の經は大日如來が説かれたのであります、が、是等の經は釋迦如來が説かれたのもあり、文珠、普賢の説かれたのもあり、金剛薩埵の

説かれたのもあり、區々になつて居ります。そこで東寺の杲實師は是等雜部の經典は多くは釋迦如來が説き、少分は法身如來が説かれたのだと云ひ、高野の宥快師は惣じて云へば變化身の説であるが、別して云へば普賢、文殊、金剛手等の説もあると云ひ、此の雜部の密教に就ては古來種々六ヶしい學説があります。が、判り易く云へば釋尊の説かれた顯教の中に秘密的分子がだん／＼含まれて居る、それを雜部の密教といつたのであります。大師は秘鍵に應化の釋迦は給孤園に在まして菩薩天人の爲めに畫像壇法真言手印等を説き玉ふ亦た是れ秘密なりと仰せられてあります。秘密眼を以て見る時は顯教の中にも、或は印を説き、或は造檀の法を説き、或は真言多羅尼を説き、秘密の幽旨をテラホラ説かれてあるのであります。六度經には釋尊一代の説法を五種に分類して、第五に多羅尼門と云ふを擧げられてある、その多羅尼門とは真言多羅尼教の事たるは云ふまでもありません。又守護經にも釋尊が金剛手に向つて秘密の修行法に關する事を種々お話になつて、我れ無量無數劫の長い間六度の修行を積み、最後に悉多太子と生れて、更らに六ヶ

年間苦行したけれど、まだ大覺を開く事ができない、どうしたものかと苦悶して居た所、そこへ無量の化佛が現はれてお前はそこで何にをして居るか、と問はれたので、困つて居ります。御慈悲を以て修行法を教へて下さい、とお願ひした所、それでは教へてやらうと云ふので、鼻端に月輪を想ひ、月輪の中に唵字の觀を作せよ、と仰せられたので、その通り觀念を凝らせしに曉星出づるの時に至り、朗然として無上大菩提を悟ることができた、とて唵字觀の尊いことを讚歎し、歡喜のお心持ちを述べられてあります。是等の經文によりて見る時は、釋尊が真言秘密の幽旨を十分に理解して居られたのみならず、顯教中に多く秘密を説かれてある事も能く判ります。故に大師は秘密に就て、顯ケ中の秘密と、秘ケ中の秘密との二種ある旨を説かれてあります。尙密教に就ては弘法大師の傳へられた真言密教を正統として研究すべきは勿論であります。此の外にまだ種々の密教があります。一は釋尊以前に天竺に弘つて居た密教があり、二は釋尊が顯教中に説かれた密教があり、三は龍猛菩薩の開塔以前に印度に隱顯して居た一種の密教があり、四は弘

法大師以前に日本に傳つて居た密教があり、五は台密と稱する慈覺智證等の傳へられたる密教があり、六は後入唐諸家の傳へて來た密教があり、是等各種の密教と、正統の眞言密教との關係并に比較對照、及び長短正邪等につきては、お話すべき事が多いけれど、それは教理史に就て御研究を願ひます。

八、眞言宗の戒律觀

八萬四千の經典を分類すると、戒、定、慧の三つになります。戒律はそれほど佛典の上に重要な位地を占めて居るのであります。戒律とは梵語でいへば尸羅と云ひ、それを譯すれば防非止惡と云ふことになります。則ち非違を防ぎて惡事を制止すると云ふのであるから、佛道修行上之れほど大切な事はありません。さて眞言宗には此の戒律をどう眺めて居るかと云ふに、甚だ大切な事として、高祖大師は顯密の二戒を堅固に護持せよと遺戒せられてあります。その顯戒に沙彌戒、具足戒、二百五十戒、五百戒等の無量の戒があります。眞言宗にはそれを淨菩提心戒の一戒に約めてあります。淨菩提心を堅固に護持すれば、それが無量の戒を守ることになるので、淨菩提心が無

量の戒律の根本本體であると説くのであります。我等一たび淨菩提心を起せば、その功德によりて本不生の智見が開けます。本不生の智見が開ける時には生、滅、斷、常、一、異、去、來のあらゆる迷見妄見を照破することができます。迷妄の邪見を照破すれば身口意の過非を防ぐことができます。大日經に之れを三世無障礙智戒と仰せられてあります。三世無障礙智戒とは三平等の秘觀に安住することであり、我等が身口意平等の觀念を凝らせば、我等の三業は自然に清められて、佛の身口意に一致し、無碍渉入することができ、佛と我等と無碍渉入するときは、他の一切の人々の三密も亦た之れと同様に佛の三密に無碍渉入するので、此の三つが平等一體になります。斯ふなりますれば我等の身口意の過失は自然に改められ、あらゆる非違は自然に清められ、二百五十戒、五百戒のあらゆる戒律は自然に此の三平等觀の中に包含せられることになります。之れを無障礙戒と云ふので、此の無障礙戒は不壞金剛戒とも申します。なせなれば聲聞緣覺等の羅漢の戒律は一期盡形壽までを境とし、此の身が死ぬるまでを境と致しますけれど、淨菩提心戒は

三世に亘り、常恒に護持せねばならぬからであります。ですから真言宗の戒律は、必ずしも鐵鉢を持たなくとも、錫杖をつかなくとも、二食の持齋を守らなくとも、淨菩提心戒を堅固に護持し、信念を凝らして佛の靈徳に一致すれば、一切の戒律を自然に守ることになるのであります。その淨菩提心戒を聞いたのが十善戒で、十善戒とは身三口四意三の十戒であります。大日經の方便學所品には十善戒を法爾自然の戒體と説き、下は世間の外道より、上は秘密佛乘に至るまで、何れも皆な此の戒を持て、その果を得る旨を説かれてあります。此の十善戒を開くときは二百五十戒五百戒等の無量の戒となり、此の無量の戒を約める時は十善戒となり、身口意の三戒となり、更らに約める時は淨菩提心戒の一つに結歸する、之れが真言宗の戒律觀であります。自性上人は慈悲心を以て真言行者の戒體と爲す旨を問答せられて、真言教の本意は利他を要とするから必ず慈悲を以て戒とし、顯教の諸戒を守るを要とはしない、若し顯教の戒を守ることにありとするも、それは慈悲化他誘引の爲めでなくてはならぬ、行者自らの悉地を得んとするの目的に出でゝはなら

ない、なせと云へば大日經疏第十一に方便諸乘の戒を持たぬから真言圓滿の行を妨ぐると云ふ理は決してない、行者若し戒を犯すことあらばまさに此の念ひを爲すべし、我れ今無上大乗を志求するは普く一切有情を利せんがためなりと、さすれば犯戒の因縁とはならず、犯戒とは名けぬとあり、又た文義要集には惣持の戒行は唯だ慈悲に住して自然に惡を遮す、之れを佛戒と名くとあるからである、と云はれてあります。此の慈悲心戒も矢張高祖大師の淨菩提心戒と同じ意味に歸着するのであります。

第四章 秘 趣

一、秘密の眞意義

真言宗を密教といつたり、秘密教といつたり、秘密宗といつたり、秘密と云ふ語は真言宗の専有なるかのやうになつて居りますが、併し秘密と云ふ語は真言宗に限つたわけではない、劍道、卜筮、天文、曆算等の世間の藝術にすら、許しとか、奥義とか云ふ事があつて、その人にあらざれば輕々しく教へない

面授口傳にあらざればその妙趣を極むることはできない。又戦争などにも互に敵に知らしめないやうな暗號、隱語を用ふるを例として居る、之れを智度論には單に密號と云つてあります。秘密はお互人々の心の底にもあり、又天地の間にもあります。

さてその秘密と云ふ語は如何なる意味なりやと云ふに、之れに二つの解釋があります。一は隱すと云ふ意味と、二は知ることができぬと云ふ意味とである。前者は如來秘密と云ひ、後者は衆生秘密と云ひます。衆生秘密と云ふは、深遠にして知ることができない、之れを仰けば愈高く、之れを鑽れば愈堅く、如來の御徳は廣大にして測ることができない、三密の秘法は深幽にして知ることができない、恰かも太陽輝けとも盲者は見ることができず、雷霆轟けとも聾者は聞くことができないやうなものである、その器にあらざれば聞けども聞へず、見れども見へず、花嚴の會座に如聲如盲の衆衆があつたやうなものであります。次に如來秘密と云ふは、如來が衆生の信仰状態や、智識の程度を見計つて、素養、資格あるものでなくば深義を秘して教へないので

ある、小學生に幾何や代數を教へないやうなものであり、小兒に金庫の中や、銀行の通帳を猥りに見せないのと同様であります。それを見せないのは慳惜して見せないのではなく、その人の爲めにならぬからであります。害あつて益がないからであります。

此の秘密と云ふことに就て、大師は更らに變つた二様の眺め方をせられてあります。一は比較的の秘密にして、二は開會したる秘密であります。比較的の秘密とは浅い教へに對して深い教へを秘密と云ふのであり、開會の秘密とは秘密眼を以て見るときは大小權實の諸教悉く皆な秘密の教へと云ふことになるのであります。前の比較秘密の眺め方より云へば、秘密は眞言宗のみには限らない、浅い教へを以て深い教へに比すれば深い教へは皆な秘密と云ふことになり、外道の經書にも秘密の名稱はあり、又佛の説かれた經の中にも顯密重々の區別があり、小乗を以て外道に比すれば小乗が深秘と云ふことになり、大乘を以て小乗に比すれば大乘が深秘と云ふことになり、一乘を以て三乗教に比すれば一乘が秘密と云ふことに

なり、更らに法身の説を以て應化身の説に比すれば應化身の説は淺略にして法身の説は深奥と云ふことになり、されば秘密は較べ方によりて淺深種々に區別されますが、眞言宗の秘密は絶對の秘密にして他に比すべきものはないのであります。他の諸教は望め方によりて或は秘となり或は淺となる両面がありまして、その區別は重々に分つことができます。大師が二教論に顯密の義重々無數なりと仰せられたのは此の比較秘密の事であり、次に開會の秘密より云へば、人天教の法門も、外道吠陀の經典も、悉く皆な秘密曼荼羅の法門と云ふことになるので、高祖大師は十住心論に地獄、天堂、佛性、闍提、煩惱、菩提、生死、涅槃皆な是れ自心佛の密號名字なり、いづれをか捨て、いづれをか取らんと仰せられてあります。之れは秘密眼を以て見た場合の解釋にて、大師は之れを秘鍵に醫王の目には道にふれて皆な藥なりと仰せられたのは、此の開會の秘密の事であり、

斯様に秘密と云ふ語には種々の解釋がありますけれども、多くの場合は如來秘密が主となりて、知らしめないやう、包み隠すやうと云ふことに解せら

れて居りますが、之れに對して近時秘密排斥の思想が昂まりました、何に事に依らず開放々々と云ふ聲が高潮せられ、外交にしても、家庭にしても、秘密主義は善くないことだ、秘密の裏には必ず罪惡がひそんで居る、秘密と云へる語には取りも直さず、不純不正を意味するかの如く考ふる傾向が強くなつて參りました。が、併し之も餘り極端な考へかたと思ひます、人生はどこまでいつても、秘密を絶對に無くすると云ふことは不可能であります。人智が如何に進みても、秘密の世界は狭くなりません、寧ろ却つて未知の世界が擴大せられるやうな感がせられます。更らに又一面より考ふれば、人生の秘密は人智の進歩と比例するものにて、減るものでもなければ、減すこともできないものであります。裸體の野蠻人が、だんく、身に着物を纏うて、肌を隠すやうになり、小兒がいつとはなく、物心がつくに從つて、衣服を以て身を覆ふことを知るやうになり、その覆ひ隠す程度は人智の程度と比例するやうであります。又言葉にしても、動作にしても、露骨を避け、剝き出しを忌み、萬事慎み深くなりつゝあると云ふことは、それ丈秘密の領分が、形を變へて、展開さ

れつゝあるものとも考へられるのであります。

二、印契の秘趣

手に印を結ぶと云ふのは、印契の事でありまして、此の印契は祕密の中の祕密とせられ、猥りに説くときは越三昧耶の罪を招くとありまするが、今發心の因縁の爲めに且く一端丈を御紹介致ませう。印の結び方には百千無量の種類がありまして、召請の印によりては佛菩薩を召請し、供養の印によりては佛菩薩を供養し、或は寶珠の印を結びて信を凝らせば財寶を雨らし、或は利劍の印を結びて心念を凝らせば魔縁を退散せしむる等、印契の功德によりて宇宙の神秘を躍動せしむることができるのであります。

此の印契の事を又印明とも申します、明とは口に唱ふる真言陀羅尼のことにて、その真言陀羅尼を明と名くる所以は、明來暗去の意であります、真言陀羅尼を唱ふる功德により、無明煩惱の黑暗を除きますから明と云つたのであります。印とは決定不改の義なりと祕藏記に仰せられてあります、恰も我等が印章を捺して約束した事は違背變約しないのと同様の意味であ

ります。藥師如來の藥壺の印は衆生の病氣を治癒せしむべき御誓願を示され、虚空藏菩薩の寶珠の印は衆生に財寶を授與すべき御本誓を表せられ、印契は一々皆な深き佛意を表示せられて居るのであります。千代萩の芝居を見ると、仁木彈正が花道から出で印を結ぶとすぐ鼠に化ける所がある、之れは印の功力を藝術の上に表現したのであります。又鞍馬山の僧正坊より牛若丸が授かりたと云ふ、劍道奥義の巻物には、九字の印明を書き記されてある、之れは精神を鍛練する上に印の功德を加味せられたのであります。斯様に印契に對する神祕的の功用は種々の方面に傳播せられて居りまして、一休禪師と忠義大徳との問答なども印契に關する面白い話だと思ひます。一休禪師は或る時高野山に登り、忠義大徳が壇上にて、印を結び、祈念を凝らし、修法せるを見て、印に何んの感應かあらんとて、高聲に嘲笑して、將に門を出て去らんとする時、忠義大徳は修法を終り、檀を下り、一休の去らんとするを見て靜かに二三度手を拍らしに、一休後へ振り向きて見る、忠義更らに手を伸べて招きしに一休は何に事ならんと忠義の前に參りました、その時忠義

大徳曰く印契に感應なきやと、流石の一休禪師もそこに跪いて三拜せられたと云ふこととであります。又今春大和にて國粹會員と、水平社員と大争闘を起した、その原因を聞くに、指を二本出した、イヤ四本出した、と云ふのが争ひの元だと云ふことである、指を四本出したのは侮辱したものだ、と云ひ、イヤ二本出して荷物は二荷だといつたのじやと云ひ、それが揉め上りて、數千人の人が入り亂れて血の雨を降らし、三縣下の警官を悉く召集し、軍隊まで出動せんとするほどの大騒動を惹き起した、その根本は指を二本出した、四本出したと云ふにある、指端のちよいと動かし方によりて、かゝる大事を惹き越した事を思へば、印契印相の徒事ならざるわけも知ることが出来ようと思ひます。

我等が佛前に向つて先づ掌を合はしますると、其の掌を合はしたそこに深い、神祕が含まれて居るのであります。我等は胎内にある時手を合せて居ります、それが則ち蓮華合掌の印であります、故に蓮華合掌の事を、經に本三昧耶の印と名けてあります、それから胎内を出て來ますると、兩手を放

して別々に堅くこぶしを握ります、それが拳印になつて居ります、それを大師は秘鍵に手を金蓮の場に分ちと仰せられてあります、此の處より化他門に出て、種々の事業を爲す順序を開いたのが行法の次第であります、秘藏記に蓮花合掌を解して、二手を理智と名け、左手は靜なるが故に理と名く、胎藏なり、右手は一切の事を辨するが故に智と名く、金剛界なり、左の五指は胎藏の五智にして、右手の五指は金剛界の五智なりと仰せられてあります、攝無量經にも左手の五指をば胎藏界の五智と名け、右手の五指をば金剛界の五智と名くとあり、二手を合する時は理智不二の幽旨を顯はすのであります、大般若經の五百二十四に、當さに知るべし、人の右の手の能く衆事を爲すが如く、般若波羅密多は能く一切の殊勝を引生ず、人の左手の作す所便ならざるが如く、前五波羅密多は殊勝の善法を引生ずる事能はず、と説けるは印相の秘趣を閃說せるものと見る事ができます、與教大師は定惠の二手を以て佛界衆生界に配する時は、左は衆生界にして、右は佛界なり、左の五指の上は右の五指を重ねることは、衆生界を以て佛界に歸するの義なり、と仰せら

れ、兩手を合掌する時は生佛加持感應の祕趣を結び顯はす旨を示されてあります。

要するに印は我等の二手十指によりて、我等の念願と意思とを大靈に通じ、又大靈の意思と命令とを我等が感受する所の感應道交の唯一の方法なのであります。我等の意思は多くの場合言葉によりて通せられるけれど遠く離れて言葉の通じない所には、水兵が信號を以て話をするやうに、動作によりて意思を通ずる場合がある。大靈と我等との意思交感には、言葉を以て通ずる場合もあり、又心を以て感通する場合もある。それと同時に所作や動作によりて感通する場合も亦たあるのであります。それが則ち今ま言ふ所の印契なのであります。

三、本堂の本尊と心内の本尊

信仰の対象を本尊と云ひ、その本尊佛に大日如來を祭れるあり、地藏菩薩を祭れるあり、文珠、普賢、彌勒、釋迦等の佛菩薩を祭れるあり、人々皆な信ずる所が異り、寺院にしても甲乙丙丁皆な本尊佛が違つて居る。眞言宗の本尊佛

は一體何んと云ふ佛様であるか、どの佛様が本統の本尊様であるか、かういふ問に對して、或人は大日如來が眞言宗の本尊様だと云ひ、或人は大師様だと云ひ、又或人は十方有縁の佛様は皆な本尊様だと云ひ、捕へ所がないやうな感じがする。更らに又段々深く問ひ詰めると、衆生心地の曼荼羅だと云ふやうな説に傾いてくる。本尊様は本堂にあるかと思へば我等の心内にある様にもあり、心内にあるのかと思へば又本堂にある様にも思はれ、何れが何れやら、どうも判らぬ、と云ふ様に疑惑の霧に蔽はれて居る人が少くないやうである。それは其の筈にて本堂にあるのも本統の本尊様であり、心内にあるのも又本統の本尊様なので、二者は結局一致に歸するのであります。可笑しいやうだけれど、決して可笑しいことではないのであります。經論には主觀佛を力説した所もあり、又容觀佛を主に説いた所もある、秘藏記には本尊義と云へる一章を設け、本尊は我等が胸中に具有せる自性清淨心である、此の自性清淨心は世間出世間に於て最尊最高だから本尊と云ふと仰せられてあります、之れは主觀佛を主にして説かれたもので、その自性清淨心の具徳

を圖畫に示されたのが曼陀羅の佛様で曼陀羅の佛様はその儘に法界宮殿の眞佛であります。そこで事相上に内の供養、外の供養と云ふことがあり、内の供養とは内に向つて自己心内の佛様を供養するので、外の供養とは木像畫像の佛様を供養するのであります。而もその内外の供養は互に相ひ一致するので、内佛を供養するのは外佛を供養することになり、外佛を供養するは内佛を供養することになるのであります。で信念の固からぬものは、外佛に歸命して、ふわ／＼したる輕毛隨風の如き散亂の心を統一するのは、外佛より修行の捷徑であり、それには先づ歸依の本尊佛を定め、只管本尊に歸依し、信念を凝らし、本尊の内證三昧を修習するのが何により修道の肝要であります。然るに朝に觀世音を信ずるかと思へば、夕には歡喜天を歸依すると云ふ風に浮草の如き信念は大の禁物であります。勿論それも幾分の結縁にはなりませうけれど、早く悉地を得る所以の要道ではないのであります。之れと同様の思想が大日經の本尊三昧品にも表はれて居ります。本尊に字印形の三種ある旨を説き、その字印形に各々有相と無相との二種を説き、自身

の外に本尊を立つるを有相と爲し、自身を以て直に本尊と爲すを無相とする旨を説かれてあります。されば種子を書きて祭り、印契を結びて觀念し、尊像を祭りて拜むは有相の修行にて、有相の修行は秘密の極致でなく、有相の修行より漸次無相の三昧に進まなければならぬ、その無相の三昧に向つて進み進んで極底に徹すればそこに神秘の世界が展開せられるのである。そこが曼荼羅の境界である。そこに至れば法身如來のお姿も拜することができ、微妙の法門も聞くことができる。さて然らばその法身如來は如何なる御姿なりやと云ふに、人格的の佛様だとも云へるし、超人格的の佛様だとも云へるし、又非人格的の佛様だとも云へるのであります。なせと云へば、その身相は遍法界の大神なるが故に非人格だとも云ふことができ、又萬德圓滿の御德より云へば超人格だとも云ふことができ、又常恒不斷に宇宙の大目的に向つて活動し給へる點より云へば、人格的であるとも云ふことができます。からであります。此の三方面を綜合した所に法身如來の面容を感見することができるので、此の如きは、大日如來ばかりでなく、その他の一切の佛菩薩

も皆なさうなのであります。有相の修行より無相の觀行に進み、無相の觀行の極底に達して、始めて三世十方の佛様を親しく拜し奉ることができるのである。此の佛様は遠い彼方より飛來せられるのではなく、實に我等の心内宮殿より現はれ出で給ふ所の佛菩薩であります。斯く云へばとて、木像畫像の佛様を疎かに思ふてはなりません。畫木像の御姿はそれが眞佛の影像なのであるから、影像を透うして眞佛を感じし、眞佛の靈徳を直に影像の上に拜し奉ることができるのであります。是れ則ち即事而眞の幽旨にて、此の事は下に至り別にお話しすることに致しませう。

四、慈悲形の佛と忿怒形の佛

佛菩薩の御尊像には男形あり、女形あり、童形あり、又夜叉形、鬼形、畜形等種々の別あり、而も一々皆なその本誓三昧が違つて居るのであります。その中にて慈愛の御情けに満ちくたる面貌の佛様に對しては、親しみの心を感じ、思はず知らず頭が下るやうに思はれますが、之れに反して恐ろしき忿怒形の尊像に對しては尊敬の念が起るよりも、先づ恐怖の心が先きに起るや

うに思はれます。一體佛様は衆生可愛の御慈悲より、此の娑婆世界へ教化の爲め御苦勞下されたのだから、慈母の赤子に於けるが如く、慈愛の心に充ち満ちて居らせらるべき筈なるに、忿怒御腹立ちの恐ろしき姿を現はされると云ふは首肯し難い事に感せられ、凡夫の我々にても怒りの色を顔に表はすと云ふ事は慎まねばならぬ事なるに、佛様が怒りの姿を現はして居らせらるゝは不思議のやうであります。之れには深い理由があるのであります。

内に慈悲の心を持ちて、外に忿怒の相を現はせるは、剛強難化の衆生を教化せんが爲めであります。我等凡人の怒りには、短氣疍癢の怒りと、慈悲愛念の怒りと二種の別がありますが、佛様の怒りには慈悲愛念の怒りのみにて短氣疍癢のお怒りはあらせられないのであります。短氣疍癢の怒りとは、瞋恚の煩惱より起れる、車夫馬丁などの争ひがそれであり、貪慾の煩惱より起れる、勞動争議、小作争議などがそれであり、愚痴の煩惱より起れる、男女痴情の忿激の如きがそれであり、それから慈悲愛念の怒りとは、親が子に對

する怒りの如き、教訓と矯正と懲らしめとの慈愛の心より出た忿りであり、
 巡査が犯人に對し、典獄監守が罪人に對する嚴めしき姿は、瞋り、惡む心の發
 動ではなく、悔悟改心せしめたいとの動機より出て居ります。それと同様に
 佛様が忿怒形を現はし給へるは、衆生心内の惡心や、煩惱を翻さしめんが爲
 めに、假りに忿怒の姿を現して居られるので、八大童子祕要法品には、金剛手
 の言はく、一切衆生は意相不同なり、或は順、或は逆なり、是の故に如來慈と怒
 との身を現はして利益を爲し玉ふと説いてあります。

忿怒尊に就て經典の上に五忿怒、八忿怒等の忿怒尊を説かれてあります。
 五忿怒とは不動明王、降三世明王、軍荼利明王、大威德明王、金剛夜及明王であ
 ります。八忿怒とは五忿怒の上に、馬頭明王、烏菟濫摩明王、無能勝明王の三尊
 を加へるのであります。その中不動明王は大日如來が假りに奴僕の姿を現
 はされたので、劍と索とを持ち、佛道の修業者を擁護し、加護して、天魔だとか
 毘那夜迦だとか、或は惡鬼邪神等の障礙を退散せしめんが爲めに、忿怒火生
 の三昧に入つて居られるのであります。降三世明王は過去現在未來の三世

の貪瞋痴の三毒を降伏し玉ひ、軍荼利明王は常隨魔を調伏し、毘那夜迦を降
 伏し、諸の怨敵等を降伏し玉ひ、金剛夜及明王は金剛の智牙を以て、煩惱惱煩
 惱を噛みくだき、愚昧の衆生を驚悟せしめ給ひ、大威德明王は大牛を座とし、
 六面六臂六足にして三目を有し、極忿怒の狀を作し、大威勢を示し、國家を擁
 護し、惡魔を降伏し給ふのであります。此五尊を五大明王と稱し、五方擁護の
 尊とも申します。是等の忿怒尊は忿瞋三昧に入り、折伏の門を出で、主觀的に
 は我等衆生の惡心煩惱を斷除せしめ、客觀的には外界の天魔波旬を悉く退
 散せしめ給はんとするの御本誓にて、佛菩薩の下化影現には種々の種類が
 あり、常には之を三種に分類するのであります。一は自性輪身と云ひ、之れは
 如來部であり、二は正法輪身と云ひ、之れは菩薩部であり、三は教令輪身と云
 ひ、之れは明王部であります。自性輪身は皇帝の如く、正法輪身は大臣の如く、
 教令輪身は將軍の如きにて、一身の三徳なれども、分けて云へば右の如き關
 係となるのであります。是等諸尊の御尊像、并に三摩耶形、及び御誓願等につ
 きて、種々甚深の秘趣あれど、述もこゝに述べ盡くすことはできません。

五、現世利益と加持祈禱

現世利益の加持祈禱を迷信だと嘲るものがある。けれど、それは物質主義の痼疾に罹れるものゝ言にて、人類の福祉を祈り、國家の安康を祈るは、迷信でも何んでもない。譏らば譏れ、笑はゞ笑へ、そんな事は決して齒牙にかくるに足らないのである。眞言宗の經典には加持と云ふ言葉を多く用いて、祈禱と云ふ言葉は餘り使つてない。けれど、その精神は經典の上に溢れて居るのであります。先づ加持の方より申しますと、之れに三密加持と、三力加持との二種の加持があります。三密加持と云ふは、佛の大慈悲の救済力が我等の心身の上に光被されるのが加てありて、それを我等が感激と歡喜の心を以て感受するのが持であります。又た我等が神秘の扉を開いて、大靈に面接するには、偉大なる引攝の力と、加護の力に依らなければなりません。それと同時に自分にもそれを受け入れて堅持するの素質がなくてはなりません。それを三密加持と云ふのであります。又三力加持とは、迷ひの巷を出で、佛果の彼岸に至るには、必ず三つの力が合體しなければならぬ。三つの力とは自分

の善根功德の力と、佛の大慈大悲の加被力と、十方社會の援護の力との三つであります。此の三つが一致しなければ何に事も成功するものでない。喩へば學生が勉強するにも、自分の向上發奮の力と、師兄の訓育提擲の力と、社會の刺戟や、感化や、援助の力と、これらの三力が一致しなければ決して學問ができるものでない。社會人生の事は凡べて此の三力に依らなければならぬ。いので、自力宗だ、他力宗だ、と云ふやうな事を能く云ふものがありますが、自力ばかりで佛位に登れる道理がない、又他力ばかりで淨土に往生ができる道理がない、世間の事に就て考へて見てもすぐ判る。若しそれが本統だとすれば因果の理法に反することになる。そこで眞言宗には三力加持の原則の上に加持祈禱を説き、現世利益を論するのであります。所が奇瑞靈驗を否定して迷信だと排斥する人がありますが、併しさうばかりはいはれないので、世の中には一種不思議の神秘靈驗と云ひませうか、奇績利益と申しませうか、兎に角さういふ事實のある事は否まれないのであります。それを直に神佛が救ひの手を垂れさせられるのだと解するか、或は心理學上より一種の

精神能力として解釋するか、或は又神秘的に感應道交の力に依ると解するか、何れにしても心あるものは靜かに考へて見なければならぬ事にて、古來さうした法力の體驗者がたんとあり、現に今日精神療法とか、祈禱療法とか云ふ事が熾んに行はれ、科學的文明國を以て天下に誇つて居る米國などにも、歐洲大戰前後より頓みに祈禱療法が盛んに流行し、ナザレ人協會の名を以て今では西大陸は申すに及ばず、遠く歐羅巴より、埃及方面にまで普及し、種々の病氣が不思議に治り、醫師の見放したもので、着々奇效を奏し、醫師間にもその效驗を承認するに至つたと傳へられて居る。併し奇績と云ひ、神秘と云ひ、法驗と云ふやうな問題を、科學哲學の方面より考へると非常に難々しい問題になるので、それをこゝに評論することはできませぬが、兎に角大師は神泉苑に雨を祈りて雨を降らし、藥子の亂に際して朝敵退散の祈禱を奉修し、忽ち法驗を現はされ、加持の力によりて現世に種々の利益を施し、祈禱の效によりて目前に種々の奇瑞を示されたのであります。

さて然らば眞言宗には祈禱法をどういふ風に説いてあるかと云ふに、之

れに四種の祈禱法があります。一は息災の祈禱と云ひ、二は增益の祈禱と云ひ、三は敬愛の祈禱と云ひ、四は調伏の祈禱と云ひます。その中息災の祈禱とは毘盧遮那の三昧に入りて、自分の惡業煩惱を消除すると共に、他人の爲めにも丹精を凝らして諸の災難を燒滅せしめるのであります。增益の祈禱とは極喜怡相の三昧に入りて、榮達を求むるもの、慶幸を願ふもの、智慧を望むものに皆な成就を得せしめるのであります。敬愛の祈禱とは降三世明王の三昧に入りて、怨憎等の障礙を摧破して、敬愛の念を生せしむるの法であります。調伏の祈禱は忿怒の三昧に入りて、彼の惡人の貪瞋痴の煩惱、并に所作の惡事を燒除して、長壽福樂を得せしむるのであります。そしてそれ等の祈禱には四種皆な方位、日時、色彩等の事相が違ふのであります。息災の時は白月に始め、衣袈裟なども白色を被着し、祭壇は圓形に造り、方位は北方に向つて祈禱するのであります。增益は黄色の衣袈裟を被着し、祭壇は方形に造り、方位は東方に向つて祈禱するのであります。調伏は黒月に始め、黒色の服を着し、三角の壇を造り、南方に向つて祈禱するのであります。此の如く祈禱にはそれぞれ

れ性質相應の施設を要するので、祈禱を始める時刻なども、調伏の時は夜半に始め、増益の時は日出に始める、と云ふやうな法規があります。その意味を一々こゝに説くことはできませんが、何れも皆な深い秘趣があるので、輕々しく思つてはならないのであります。四種の祈禱を説いた關係上、序に一言して置きたいのは、調伏の祈禱の事であり、佛敎は慈悲の心を以て人を導き助けるを目的とするにも拘らず、他人を降伏したり、調伏したりすると云ふ事は合點の往かぬことのやうであります。併し之れは所謂慈悲の殺生と云ふものにて、萬人を助ける爲めに一人を調伏し、大の虫を助ける爲めに小の虫を殺し、正義を擁護する爲めに邪軍を懲らしめるのであります。故に降伏は憎惡の心や、敵對の觀念を抱きてはならないのであります。憫みの心、慈みの心を以て祈念をせねばならぬのが原則であります。義訣の中に佛此の法を説くことは智者の爲めにのみ説く、愚人の爲めにせず、然る所以は佛滅度の後惡人あつて、大勢力を恃んで、邪道に歸し、三寶を破滅し、諸の衆生をして涅槃の眼を失せしむることあり。菩薩悲愍の心を以て此の法を修す

れば大功德あり、然れども惡心を起して衆生を損害すれば大重罪を得べしと説き、又蘇悉地經には此の祈禱を爲すに就て二つの用心を説かれてあります。一は少し位の罪過の爲めに此の法を行つてはならぬと云ふこと、二は財寶を貪る心が少しでも混つてはならぬと云ふことであります。若し是等の用心を犯した時は、管たに悉地を成就しないのみならず、自分が却て阿鼻地獄に陥るべしと説かれてあります。

六、眞言の唱へ方

眞言宗は聲字卽實相といつて、眞言陀羅尼を唱へることを最も大切といひ、それが取りも直さず、往生成佛の正因だと教へまするので、至心恭敬の思ひを以て、眞言をお唱へせねばなりません。眞言を唱へるには長き聲の字は長く引き、短き聲の字は短く唱へて、長短高下、音韻の屈曲は梵音の法の如く念誦せねばなりません。若し法の如く念誦しない時は功德が缺けて利益を受くることができません。又いろいろの事を思つたり、唱へながら腹を立てたり、欠伸をしたり、居睡りをするなど皆な缺支分の念誦となりて、功德が薄

くなると云ふことでありますから、心を散亂せしめないよう、心を落ち着けて、静かにお唱へしなければなりません。舌端より出づる一々の文字は皆な變じて金色の佛様となり、虚空に遍滿して念誦者を圍繞すと想ひ、お唱へをせよと、或る經に説かれてあります。

此の念誦に就て五種念誦と云ふことがあります。一は音聲念誦と云ひ、自他ともに聞ゆる程度に高からず低からざる聲を以て唱へるのである、之れを蓮花念誦とも申します。二は金剛念誦と云ひ、唇と齒とを合はして、舌の頭を微し動かす位の程度にて、音聲を出さずに唱へるのである。三は三摩地念誦と云ひ、口も動かさず、舌も動かさず、音聲も出さず、心にて唱へるのである、心中に蓮花あり、蓮花の上に月輪あり、月輪の上に眞言の文字一々明瞭に現はるゝやうの心を以て唱へるのである。四は聲生念誦と云ひ、又實相念誦とも云ひ、眞言の字義を念誦するのである、佛様が微妙の御聲にて唱へらるゝ眞言が、その御口より流れ出でゝ我等の心内に泌み入り、心月輪の上に明瞭に浮びて、その文字恰も花鬘の如く、水精の玉を明鏡の上に並べたるが如く、

清朗にして映徹し、又我等の唱ふる眞言は、鈴を揺るが如くに間斷なく、緩からず急ならず、自分自身の耳に聞ゆる位の聲にて、氣息を調和し、安徐として唱へるのである。五は光明念誦と云ひ、口より光明を出すと念ふて唱へるので、聲を出すにも聲を出さざるにも口より光明を放て、法界を照すと想ひながら唱へるから、光明念誦と云ふのであります。

斯様にいろ／＼の唱へ方はあれど、我々はその中第一の音聲念誦に依るのがよいと古徳は教へられてあります。此の音聲念誦は眞言を唱ふるにその聲高からず低からず、急ならず緩ならず、字々分明に自分の耳にも聞へ、他人の耳にも聞ゆる程度に唱へるのであります。要するに大切の念ひを以て誦へなければなりません。第一には我々の浮き／＼した散亂の心を落ち着きができるのであります。第二には動搖の心が落ち着いてたる心持ちに安住せしめることができます。第三には佛様に對して眞に有り難いと云ふ信仰の心が起つて参ります。第四には教益の

力に依りて種々なる障災を攘ひ除きて頂くことができます。第五には一眞言に信を決定して念誦相續するときは、一密口稱の功德によりて、やがて三密具足の時至り、遂には即身成佛ができるようになります。

所が我々の心は兎角散亂し易くて、一心専念になると云ふことが六ヶしい、その時は且く深呼吸をするのがよいと思ひます、少しの間深呼吸をすれば自然に心が鎮まります、大師様は念誦の時若し散心あらば出入の息を觀し、然して後に念誦せよと仰せられてあります。出入の息を觀じて散亂の心を鎮めるは、大小顯密の通則であります。一息より十息まで、くり返へしくりかへし算へるのである、その數へ方に出息のみを數へると、入息のみを數へると、出息入息をともに數へると、三つの法があります。それから眞言念誦の後には必ず大金刚輪陀羅尼を唱へよと古徳が教へられてあります。それは缺支分を補ふ爲めであります。我等は兎角邪念妄想に心を亂され易いが、大金刚輪陀羅尼を唱へますると缺支分が皆な圓滿して功德を成就することができると説かれてあります。さういつたからとて放逸に邪念を起

しても構はぬと云ふのではありません。それから又眞言と云ひ、咒と云ひ、明と云ふことの區別を序に一言して置きませう。眞言とは如來の眞實語と云ふことであります。咒とは佛法未だ唐土へ來らぬ前に世間に咒禁の法あり、能く神驗を現はし、災患を除きました。眞言秘密の法を修するものも、又能く靈驗を現はし、災患を除くこと咒禁の法と相ひ似て居りますから咒といつたのであります。明とは佛光明を放ちて、その光明の中にて眞言陀羅尼を説き給ふが故に明といつたのであります。以上ざつと眞言陀羅尼の唱へ方の法則の概略を述べました。次にはその功德利益を説かねばならぬ順序であります。それは後の章に至りてお話を致しませう。

七、灌頂の法益

眞言の秘密を味識せんとするものは必ず先づ灌頂の壇に入り、阿闍梨より印契眞言を授かりて、然る後に修行せねばならぬので、若し猥りに眞言の法を弄ぶときは、管だに勞のみ多くして何んの法益も得られないのみならず、却て越法の罪を招くことになる。經に説かれてあります。

灌頂とは頂きに水を灌ぐと云ふことにて、灑水の法は則ち灌頂の略式であります。此の灌頂の儀式は天竺の國王の即位式に準じたものにて、大日經疏の第八に灌頂の法は先づ國土の地圖を作り、太子をその上に座せしめ、珍寶を以て莊嚴し、多くの眷屬陪列し、韋陀梵師、四大海水に寶藥を入れたる寶水を以て、その頂上に灌ぎ、先王の道を説きて教誨を垂れ、輪王の王業を繼承するの誓ひを爲さしむるなりとあり。眞言宗の灌頂はこれに準じて如來大悲の智水を灌ぎて法王子の位に登り佛位を紹かしむるの式であります。此の灌頂に五種ありまして、一は一見曼陀羅と云ひ、一たび兩部曼陀羅を拜し灌頂道場を拜見してその莊嚴の光景に感激するの人であります。二は結縁灌頂と云ひ、之れは略式ながらも灌頂を受け、投花を爲し、一印一明を阿闍梨より受けるのであります。三は授明灌頂と云ひ、之れは作法を具足して投花得佛を爲し、その得佛したる佛菩薩の儀軌を授かるので、大師が青龍寺にて六月七月兩度入壇せられたのは此の灌頂であります。四は傳法灌頂と云ひ、之れを阿闍梨位灌頂とも申し、大師が八月上旬に青龍寺にて入壇せられた

のは此の灌頂であります。五は以心灌頂と云ひ、又印法灌頂とも云ひ、最も深遠なる灌頂であります。以上五種の灌頂は何れも皆な在家の人にも通するので、僧侶のみには限らないのであります。併しそれは上古の宿福の優ぐれた人に就て云ふ事にて、今時は先づ在家の人は一見曼陀羅と、結縁灌頂と、授明灌頂との三種を授け、後の二種は容易に授けないことになつて居ります。一見曼陀羅と結縁灌頂とは器非器を擇ばず、智愚利鈍を分ちませぬから、誰れでも入壇を許して差支へないのであります。如何なる下賤な人でも、どんな悪人でも、拒否するには及ばないのであります。此の灌頂の功德利益は實に廣大でありまして、經には若し衆生一たび此の曼陀羅を見るものは、無始以來の惡業重障を摧滅して余なし、必ず定んで大菩提の記を得るが故に、鈍根薄福の人の能く遭ふ所にあらず、一たび見るすら尙難し、何に況んや次第に修行せんをやと仰せられてあります。一たび曼茶羅を拜見する功德すら尙無量無邊である。況して結縁灌頂を受くるの功德は一層高大であり、傳法灌頂、以心灌頂の殊勝なることは如來の長廣舌を以てするも尙説き盡くす

ことはできぬと説かれてあります。我等今宿因多幸にして、此の遇ひ難き密教に遇ひ、灌頂道場に入る事を得るは實に喜びの中の喜び、幸ひの中の幸ひと云はねばなりません。

此の灌頂に就て秘藏記には摩頂灌頂、授記灌頂、放光灌頂の三種を説かれてあります。摩頂灌頂とは諸佛が修行者の頂きを摩て、記別を授けられるのである。授記灌頂とは諸佛が成佛の記別を授けられるのである。放光灌頂とは諸佛が光明を放つてその人をして鴻益を被らしめるのである。此の三灌頂はともに水を以て頂きに灌くの儀式はありません。従つて灌頂とは云はれないやうである。併し灌頂とは必ずしも灑水の儀式がなければならぬと云ふ譯はないのであります。深祕の意を以て云へば、灌は大悲護念の意であり、頂は佛果最上の義であり、則ち諸佛の大悲護念に依りて佛果の最頂に至るを灌頂と云ふのであります。

八、金剛界と胎藏界

金剛界の大日如來は智拳印を結び、胎藏界の大日如來は法界定印を結ん

で居られます。金剛界の大日如來は一印會の頂上に位し、胎藏界の大日如來は八葉の中央に居し、金剛界の大日は月輪に住し、胎藏界の大日は蓮花に座して居られます。惠果和尚は秘藏記に胎藏とは理なり、金剛とは智なり、界とは身なりと仰せられてあります。金剛界は果曼荼羅にして九會に分れて居り、胎藏界は因曼荼羅にして十三大院に區畫されて居ります。之れを金胎兩部曼荼羅と云ひ、真言宗に最も大切とする所の不二の妙理も此の兩部曼荼羅の關係を説く場合に現はれて來る幽旨なのであります。曼荼羅とは天竺の語にて譯語が二様になつて居ります。唐の古い翻譯者は壇と譯してあります。それはどういふ意味かと云ふに、真言宗にては秘密の法を修するに際し、先づ七日作壇と稱して、七日間かゝり土にて壇を造り、その壇の表面に佛菩薩の尊像を描き、その尊像に向つて香花等を撃つて供養するのが法則になつて居たから、その供養法の根本に就て壇と譯したのであります。今日にては佛菩薩の尊像を皆な絹や紙に描き、或は木像に彫刻いたしますけれど、太古は皆な土壇に、その時その時、描畫したのであります。それから新譯家の

人々は輪圓具足と譯してあります、その意味は無量の佛徳を包含して何に一つとして缺けたるものなく、あらゆる佛菩薩天人鬼畜等の階級、あらゆる生物萬有を悉く網羅して居ると云ふことであります。此の曼荼羅に就て種々の種類がありました、一様ではありません、或は經所説の曼荼羅と云ひ、或は阿闍梨所傳の曼荼羅と云ひ、或は現圖曼荼羅と云ひ、それ／＼佛様の尊數とか、座位とかが違つて居るのであります。今日一般に行はれて居るのは現圖曼荼羅と稱する分であります。先づ金剛界の曼荼羅の事を一言すれば、此の曼荼羅は九會になつて居ります、その名は羯磨會、三昧耶會、微細會、供養會、四印會、一印會、理趣會、降三世羯磨會、降三世三昧耶會の九會であります。此の九會に就て因より果に至る次第と、果より因に向ふ次第との二様の眺め方がありまして、因より果に至る次第の方に就て云へば、先づ我等行者が諸の煩惱の根本たる而二の隔執を除かんが爲めに、降三世明王の三摩地に入り、弓箭を以て而二の隔執を射滅し、更らに自在天及び后妃を左右の兩足に踏み、煩惱障所知障を斷じ、阿字本不生の妙理を悟り、無上獨尊の法輪を轉じ、八

供四攝の天女より供養を受けると云ふ順序を九會に圖示せられたものと見るのであります。次に果より因に向ふ次第の方についていへば、相好具足の法身大日如來に大三法羯の四種曼荼羅を同時に具足し給へることを明し、その四曼相大は本これ六大一實の體大に歸する旨を示し、更らに剛強難化の自在天を降伏せんが爲めに大忿怒の三摩地に入り給ふ順序を九會に圖示せられたものと見るべきであります。此の金剛界の曼荼羅は十八會の本經中に見當りませんので、或るものは初の六會は初品の六會にて、第七會は十八會の中の第六會の理趣經曼荼羅であり、八九の二會は初會第二品の十曼荼羅中の第一第二の曼荼羅である。是等を合揉して九會曼荼羅とせられたと云ひ、或るものは龍猛菩薩が南天の鐵塔を開かんとせられた時、空中に九會の曼荼羅が現はれた、それを圖に寫し留めて世に傳へられたのが今の曼荼羅だと云ひ、その本據については種々の説があります。次に胎藏界の曼荼羅の事を一言すれば、此の曼荼羅は中央が八葉の蓮花で、周圍の座位が四重になつて居りますから、八葉四重の曼荼羅と云ひ、又十三院に區分さ

れてありますから、十三大院の曼荼羅とも云ひます。此の胎藏界の曼荼羅は善無畏三藏が金粟王の塔下に於て供養法を感得せられた時に、空中に影現したのを、三藏が寫し留めて世に傳へられたから現圖曼荼羅と云ふのだと云ふ説があります。此の曼荼羅を四重曼荼羅と云ひますけれど、左右は三重しかないのであります。又十三大院と云ひますけれど、八葉院、遍智院、觀音院、金剛手院、持明院、釋迦院、文珠院、除蓋障院、地藏院、虚空藏院、蘇悉地院、外金剛部院等の十二院しかないのであります。最も四大護院を加へれば十三院になる譯であります。尙この曼荼羅に就いては述ぶべき事多けれども、それは別の機會に譲ることに致しませう。

第五章 信 仰

一、真言宗の安心

安心とは發心することであり、志を立てることであり、思ひ立つことであり、決心をすることであり、ありますから、自分の現在及び將來の行爲并に思想は

此の安心を以てわき目もふらず、一貫しなければなりません。設い王候の權威を以てするも動かないと云ふ磐石の如き堅き決心を確立しなければなりません。釋尊が金剛の大心を發し給ひしとき、六種が震動したと云ふのはそのことでもあります。安心とは疑ひの雲晴れて、右せんか左せんかと迷へる心が決定し、悶々の情がさりと除かれ、春の海の如く、平和にして秋の夜の空の如くすがすがしい心になるのであります。喩へばこゝに一人の旅人あり、山又山の深山にふみ迷ひ、日將さに暮れんとして行く手さだかならず、何れに向つて進むべきかに惑ひ、不安に胸塞がるの時、測らず知人に出會ひ、而もその人はその附近街道の道案内をよく知れる人にて、その人の云ふには、私はいま都より來たのであるが、都は實に賑やかな善い所で、そこへ行くには此の街道を右へ向つて一直線に進めば程なく都へ達せられるであらう、と教へてくれたとせよ、旅人はその言葉を信じて進めば心安らかにして、そして程なく都へ着せられますが、若しその言葉を疑ひて、右に向へば果して都へ往けるであらうか否かと疑ひを抱けば、不安は遂に除かれずして、何時

までも山中に惑はねばならぬやうなものであります。

安心とはつまり自己の確信であり、信念であり、主義方針であります。それが決つて居らぬものは輕毛隨風の如く十進九退を免かれないのであります。所が此の安心と云ふ語は淨土門に多く用ゆる言葉にて、我宗には古來餘り用ひてありません。従つてその安心と云ふことが區々になつて居ります。彦岑和尚は即身成佛が眞言宗の安心だと云ひ、服部僧正は惣安心と別安心との二種の安心を分けられ、玄淨師は三力安心を唱へ、雲照和尚は十善安心を説かれ、宗義章の著者は凡聖不二だと云ひ、隆應和尚は阿字本不生安心を説かれ、蓮臺和尚は光明眞言安心を主張し、その他種々の説があります。要するに龍猛菩薩の謂ゆる菩提心安心の外はないと思ひます。菩提心に安住するのが眞言宗の安心であります。之れを如來甘露の一粒丸と云ひ、眞言家傳の醍醐藥と申すべきで、安心は教義上の理談に流れて徒らに六ヶしくなりても困り、去りとして教義の根柢を沒却して臆説に流れてもいけないと思ひます。安心は教義信仰の要諦をすらりと誰れにも分るよう一口に了解し

得られねばなりません。

菩提心とは菩提を求むるの心にて三覺圓滿の覺りを開き即身成佛せんとするの心であります。此の菩提心を善無畏三藏は白淨信心と仰せられてあります。菩提心は言葉を換へて云へば信心と云ふことで、信心を得れば安心が得られ安心を得んとすれば信心を得ねばならぬ、その信心とは何にを信するのかと云へば、佛の教へを信じ、我等の如き愚鈍の衆生も聖凡不二の故にやがて即身成佛させて頂くことができると信するのであります。ですから信心とは、今日は稻荷さんを信じ、明日は聖天さんを信心する、と云ふやうな、その時々の軽い浮草の如き浮氣信心を云ふのではなく、今ま云ふ信心は懸命の徹底的信心を云ふのであります。法住師は祕密安心略章の中に、在家の老若男女は我等の如き拙き身なれど、善智識と俱に即身成佛せんこそ有難けれど、無二の信心を起すべし、此の深信を又た白淨信心とも云ひ、正しくは淨菩提心の體にして、佛樹の芽を生ずる種子なり、能く培ひて莖へ出でんやう、同行とも語り合ひ、師の坊の教化を受け、佛祖の報恩を勤め、先亡の

回向をし給ふべし。その唱へらるゝ有相口稱の眞言こそ全に即する所の第一實際妙極の三密なれと、念々に安心決定すべきなりと云へるは言葉簡なれど實に意味深長にて、眞言宗の安心は此の言葉の中に盡くされて居ると思ひます。

要するに信心と菩提心とは名は異れども體は同じく、眞言宗の安心は菩提心だといつてもよし、信心だといつてもよい、菩提を求むる信仰心の決定した所が菩提心安心で、その信仰心が確立した爲め疑ひの雲晴れ安泰の心を得た所が白淨信心の安心であります。此の二者の關係は下に至り題を改めて今少し詳しく述べることに致しませう。

二、白淨信心と菩提心

白淨信心とは菩提心のことであり、菩提心のことを白淨信心と申します。故に善無畏三藏は菩提心とは白淨信心の義なりと仰せられてあります。此の白淨信心は實に萬善萬徳の根本であり、往生成佛の正因であります。故に智度論には我れ今ま甘露味の門を開かん、信を生ずるものあらば歡喜を得

んと説きたまひ、又佛法の大海は信を能入とすと仰せられてあります。然るに世人多くは家事が忙しくて信心する隙なしと云ふは信心の味を知らぬが爲めに、信心とは佛に不思議の願力あることを少しも疑はず、善きも惡しきもあなた委せに頼み奉る眞實心の一つなれば、心だけの信心は誰れでも出來ぬと云ふことはない筈であります。信心には歡喜の意が含まれて居ります。故に信心すれば不平や不満の心が除かれ、一家の内が知氣蕭々として、歡びの心に浸ることができます。信心には輝きの意が含まれて居ります。故に信心すれば迷ひの闇は照されて怠けた心や、たわけた心や、闇い心が晴れ渡ります。信心には清涼の意が含まれて居ります。故に信心すれば瞋恚の炎や、貪慾の熱惱は打ち消されて、清い涼しい心になることができます。此の白淨信心を菩提心論には三種の菩提心に開かれてあります。菩提心とは一口に云へば決定諦信と云ふことにて、その決定諦信は即ち三摩地の菩提心であり、その三摩地の菩提心は信心の本體にてその本體が上に向つて菩提を求むる邊を勝義心と云ひ、下に向つて化益に向ふ邊を行願心と云つたの

で三種の菩提心もつまりは一つの白淨信心の外はないのであります。高祖大師は四種の菩提心を開いて説かれてありますが、之れは信心の外に三種の菩提心を開き、四種の菩提心とせられたのであります。斯く龍猛菩薩は三種の菩提心を説き、高祖大師は四種の菩提心を説き、善無畏三藏は一つの白淨信心を説かれ、三祖の御提撕が違つて居りますが、開けば四となり、合すれば一つとなるので、意味は三祖一致に歸着するのであります。此の信心に二種の種類があつて、上根の人は自心之れ佛なり、凡聖は不二なり、と諦信決定して即身成佛を目的に邁進し、下根の人は佛の慈悲を信じ、教益不思議の方に絶りて、往生淨土の信念を決定するのであります。所が此の信心の道に對して種々の誤解を爲し、信心すれば助けて貰へるからとて、爲すべき善事を爲さず、爲すべからざる悪事を敢へてするものがあり、又教益甚深の力に救はるゝを以て、悪作悪業必すしも恐るゝに足らずと思ふものがあります。之れは大なる間違ひにて、かゝる放逸邪見の心を以て一代を過ぎば、後世の得脱思ひもよらず、所謂寶の山に入りながら手を空しくして歸るの類であ

ります。而して往生淨土の行業多種ありと雖も、眞言念誦の功力に依りて若男女皆な齊しく佛祖大悲の御手に救はるゝこと、何により肝要であります。信心の水澄めば大悲の影必す宿ります、疑ひの雲晴るれば、佛日の光り必ず輝きます、我等お互はどうぞ早く疑ひを晴らして、大悲の光明に照されなければなりません。

三、往生と成佛の關係

往生は淨土へ生れることであり、成佛は佛の位に登ることである。故に二者は大に違つて居るのであります。然るに往生と成佛は同じものゝ如く説くものがあります。それは能く辨へて置かねばなりません。往生と云ふことは、彼の韋提希夫人や、月蓋長者などが、極樂は十萬億土を過ぎて遠く西方にありと信じて、死後彼の土に生れんことを願へるが如きを云ふので、之れは順次往生であります。此の娑婆世界は苦みや障礙が多くて、靜かに佛の法門を聞き、信心を疑らし、利益を頂くことが困難であるが、淨土へ往けば見るもの聞くものが清らかで、美しく、障りがなくて、佛の説法が自由に心ゆく

ばかり承ることができ、法悦を味ふことができると云ふ所より淨土往生を願ふのであります。成佛と云ふことは三祇百劫の修行を成就し、三覺を圓滿して、法王の位に登り、即身成佛して大日如來と同等の悟りを開くのであります。されば往生は修行の位であり、成佛は佛果の位であり、二者は因と果との違ひがあります。淨土に往生して而して後に成佛するので、往生は成佛の道程であります。

その往生に就て顯教の往生と、密教の往生と、大分違ひがあります。顯教に依る、往生は下品下生の往生であります。下品下生とは死後淨土に往き、蓮胎托生とて蓮花の中に孕まれ、十二大劫の久しき歲月を経て、蓮の花開け、觀音勢至の說法を聞き、菩提心を起し、六度萬行を積み、然る後に成佛するのであります。密教に依る往生は上品上生であります。上品上生とは淨土に往生して蓮胎に托生せず、直ちに佛の教化を受け、不退轉を得るのであります。眞言の教益によりて淨土に往生するものは、上品上生の悉地を得ると云ふことは、諸經にその文證が澤山あります。理趣釋經には若し人此の眞言を誦すれば、

ば、能く一切の災禍疾病を除き、命終してまさに安樂國土に生れ、上品上生を得べしとあります。此の密教の往生に又二種の區別がありました。一つは現身往生と云ひ、二は順次往生と云ひます。現身往生とは現身のまゝにて淨土に往生するので、その一二の例を云へば、高野山の如法上人は生身のまゝ、白晝に兜率天に登り給ひ、又廣澤の寛朝僧正は肉身を轉せずして登天し給ひ、又醍醐の元杲僧都は空に登り西を指して飛び去り給ひ、讚岐の僧伴僧正は與田寺山上より昇天せられたるが如きであります。又順次往生とは光明眞言の教益不思議の力に縫り、又大師御引導の力によりて、一息閉眼の後、有縁の淨土に往生するのであります。その往生する機根にまた種々等差がありました。次の生に直に成佛するあり、又二生三生を経て成佛するあり、一樣には申されませぬが、兎に角顯教に依りて往生するものに比すれば、牛車と神通寶輦との如き遅速があります。眞言の法を祕密神通乘と經に名けてあるのはそのことであります。又成佛に就ても現身の成佛と往生後の成佛とがあります。何れにしても最後に至りては、必ず眞言の三密加持により、祕密

灌頂の職位を受け、即身成佛の大果を得るので、設い顯教に依りて往生成佛する人にも、最後に至りては此の三密瑜伽の加持に依らずして佛位に登ると云ふことは決してできないのであります。

四、我宗の淨土觀

眞言宗のお淨土は何んと云ふかといへば密教花藏世界と申します。此の淨土は曼荼羅海會の淨妙國土にして、無量の佛菩薩が互に語り、互に樂み、或は法悦の三昧に入り、或は歌舞の境に遊び、歡喜極まりなきを以て極樂世界とも云ひます。此の淨土は三世に亘り、十方に遍して、無碍自在の所でありますから、彌陀如來の淨土も、彌勒菩薩の淨土も、あらゆる十方の淨土は皆な此の淨土の中に包容されて居るのであります。故に我等一たび菩提心の花開發して、三力加持の功德力に助けらるゝ時は、忽ちの間に大日如來の淨土に往生することができるのであります。此の密嚴花藏のお淨土は我等凡夫の容易に見聞すべき所ではないのであります。如來の大威神力に依るが故に、我等は此の淨土に直に往生させて頂くことができるのであります。此の

淨土の光景を描畫したものが彼の曼荼羅にて、その曼荼羅を一たび禮拜し或は拜見するのみにても無始以來の罪業を消滅し、無邊の福聚を圓滿することができると説かれてあります。我等お互は此の淨土に住居して、尊き法味に浸り、限りなき遊戯神通の快樂を受けることができるのであります。から是れほど喜ばしいことはない譯で、此の密嚴淨土に參りますれば往來自在であるから、西方淨土に居る父にも會へるし、東方淨土に居る母にも面會ができ、互に相ひ往來して親子一堂に會し、俱に佛の妙法を聽聞することができますのであります。なせと云へば十方淨土は悉くこの密嚴淨土の中に包まれて居るからであります。然らばその密教淨土は何れの處、何れの方位にありやと云ふに、それは時間を絶し、空間を絶したる絶對の靈界でありますから、方位や場所を限定することはできないのであります。十方に周遍して居りますから、強いて方位を云へば中央の御淨土であり、東西南北にあらざる其の眞中に位する淨土であると云ふの外はありませぬ。併しその中央に局在するのかと云へば、東方藥師如來の淨土も、南方觀世音の淨土も、北方釋

迦如來の淨土も、西方彌陀如來の淨土も、悉く此の密嚴淨土の外にあるのではないのであります。密嚴淨土の一部々々を、或は都率の淨土と名け、或は安養淨土と名けたのであります。此の密嚴淨土は法界宮のことにて、法界宮は魔醯首羅天王宮のことであり、此の天は第四禪天にあります。併し我宗の深旨より云へば、如來有應の處、此の宮にあらすと云ふことなしとありまして、あらゆる國土や方位は皆な此の法界宮でない所はないので、我等の斯うして棲んで居る此の町村、此の家屋、此の部屋がそのまゝ法界宮であると云ふことができ、又密嚴花藏界であると云ふことができるのであります。

此の密嚴淨土の事を祕藏記には、是の華藏世界は最上の妙樂その中に在り、故に極樂と云ふと仰せられてあります。その所在地に就て、宥快師は大日經疏に依り三段に分けて説明せられてあります。一は加持身に就て云へば、西方十萬億土の彼方にある報身の佛土と云ふことになり、二は本地身に就て云へば、高廣無邊にして相對を絶し、方位を離れたる大日如來の淨土と云ふことになり、三は行者身に就て云へば、我等衆生の八辨の肉團心、干栗多心

を直に華藏世界と云ふことになる。と云はれてあります。更らに之れを三品の悉地に就て云へば、上品は密嚴淨土の悉地であり、中品は十方淨土に往生し、下品は人天阿修羅等の悉地を得るのである。高祖大師が高野山に入定して、慈氏の下生を待つは下品の悉地であり、閉眼の後、兜史陀天に往生すと仰せられたのは、中品の悉地であり、清涼殿に即身成佛せられたのは、上品の悉地であります。

要するに密教淨土の中に種々澤山の淨土がありますが、我等は大師の御手引きによりて、その中の有縁の淨土に往生させて頂くのであります。その有縁の淨土は如何にして知ることができ、かと思ふに、先づ灌頂を受け、花得佛することによりて、何れの佛様に宿縁深きやを知り、何れの淨土に因縁厚きやを知ることができ、そこでその佛様を信仰し、歸依し、そのお淨土に往生することを念願するのが、我宗安心の至要であります。

五 大日如來の御誓願

大日如來の御誓願を普門の誓願と云ひ、その他の佛菩薩の御誓願を一門

の誓願と申します。大日如來の御誓願はあらゆる衆生の願ひや望みを悉く普く叶へさせて遣らうと云ふ御誓願にて、萬機に普應し、一切の衆生を皆な御救ひ下さる御誓ひなるを以て、普門の誓願と申すのであります。大日經には無量の衆生の爲めに、種々の趣、種々の性欲に隨ひ、方便を以て各々彼の言音に同じで、種々の威儀に住し、一切智々を宣説すと説き給ひ善無畏三藏は之れを安立無量乘と釋せられてあります。斯く大日如來は大悲深重にましまして、上根上智に限らず、下根劣惠のものに至るまで、洩さずお救ひ下さるから普門の御誓願と云ふのであります。興教大師は一切の佛菩薩の誓願本誓はこの大日の誓願にあらずと云ふことなしと仰せられてあります。次に一門の誓願とは一門の佛菩薩が一機一益の爲めに、智惠を求むるもの、爲めには智惠を授け、福を求むるもの、爲めには福を授け、權勢を望むもの、爲めには、權勢を授け給ふが如きを云ふので、彼の藥師如來は東方に淨土を構へて、十二大願を立て、衆生を救濟し給ひ、釋迦如來は靈鷲山に淨土を構へ番々出世の願を立て、衆生を助け給ひ、彌陀如來は西方極樂淨土を構へて、

四十八願を立て衆生を救濟し給ひ、觀世音菩薩は南方補陀洛山に淨土を構へて、三十三身の願を立て、衆生を引導し給ひ、中央彌勒菩薩は都卒内院の淨土を構へ當來下生の願を立て、衆生を濟度し給ふ。斯ういふ様な諸佛の別願を一門の御誓願と云ふのであります。是等の一門の御誓願は大日如來の御誓願に皆な含まれ、又諸佛菩薩は皆な大日如來の御化身でありますから、大日如來に歸依し奉るときは、自然に諸佛菩薩を歸依し奉ることになるのであります。我等が大日如來の御誓願に縋り奉りて眞言を念誦する時は、あらゆる神明佛陀は皆な我等を擁護して下さるのであります。なせと云へばあらゆる神明佛陀は皆な悉く我等をして轉迷開悟せしめんが爲めに、假りに種々のお姿を現して、方便教化に心を注がせられるのであるから、我等が眞言を唱へて、往生成佛を欣求する時は、隨喜影向して下さるのであります。故に大日如來の御眞言たる光明眞言を唱ふる時は、一切の佛菩薩の御誓願にも契ふ譯でありますから、あらゆる神明佛陀に對して光明眞言を唱へ奉るときは、何れも皆なその法樂を喜んで御納受あらせられるのであります。

それと同時に一門の佛菩薩の誓願に縋り奉りますれば、それがやがて又普門の誓願に一致することにもなるのであります。なせと云へばあらゆる佛菩薩は皆な大日如來より應現せられた佛様であるからであります。要するに法身大日如來は、大威神力と廣大の御慈悲とを以て、我等に不思議の功德を與へ給ふのであります。から、信心を疑らし、その御誓願に縋り奉る時は、我等の凡身を捨てずして淨土に往生し、愚縛の身をその儘に助けて頂くことができるのであります。之れ偏に佛智不思議の御力に依る次第にて、凡慮の測り知るべき所でなく、只だノノ仰ぎて信する外はないのであります。

六、光明眞言の信仰

光明眞言は大日如來の眞實本願内證肝心の御眞言にて、不空羂索經に説かれてあります。此の眞言を唱ふる時は一切衆生の無明愚痴の闇を照し、業障の黒雲を拂ふが故に、本有の心月輪現はれ出で、百年の闇室も、大日如來の五智の大光明に照されて、心の庫の萬徳を一時に開見することができます。故に光明眞言といつたのであります。僅かに二十三字の眞言なれども、神變

加持の不思議力に依るが故に、その功德の廣大無邊なることは須彌山を筆と爲し、四大海を墨汁と爲すとも書き盡すことはできないのであります。此眞言は日月の光りが天地の暗を照すが如く、五智の大光明に照されて能く煩惱の暗を破り、速かに佛智を證せしめ給ふのみならず、災禍を轉じて福德を生じ、貧賤を轉じて富貴を得せしめ、短命を轉じて長壽を得せしめ、愚鈍を轉じて智恵を得せしめ、惡趣を轉じて淨土と爲し、煩惱を轉じて菩提と爲すの功德が具つて居るのであります。故に此の眞言を唱へる時は、信心を體得し、如來の擁護を蒙り、大威力を得て、自在に能く一切の天魔邪神等を摧破してよく一切の希願を圓滿し、大覺の位に登つて、大歡喜を得ることができるのであります。斯くの如く此の眞言は世出世二世の希願を満足せしめ給ふのみならず、死者の菩提の爲めには此の上もなき高大なる功德があるので、經の中に種々の功德を説かれてあります。若し人重罪を犯すことありとも、此の眞言を耳に聞き、尊む心を起さば一切の罪障を消滅すと説き、又死して地獄に墮し、苦みを受くるものも、光明眞言を唱へ、土砂を加持して、死骸の上

に散し、或は墓の上に散すれば、彼の亡者忽に光明に照されて苦患を脱することを得べしと説き、又自分に信心を起す因縁なくして死したるものも、その子孫のものが死後の追善を行ひ、僧を請し、眞言を唱へ、供養を爲せば施主の信心力と、導師の加持力と、眞言の功德力とに依るが故に、那落の炎も忽に消へて、淨土に往生することができると説いてあります。斯様に自ら信心も起さず、法縁にも會はなかつた亡者も、眞言の功德力と、如來の加被力とによりて、惡趣を脱し、淨土に往生することは、之れ他力の中の大他力と申すべきであります。

此の光明眞言の唱へ方に就て、清濁長短の違ひがあり、小野廣澤の流儀に依り、又南天中天の悉曇に依て、音韻の清濁が少しづつ異つて居ります。しかしそれを一々區別することは繁雜であるのみならず、却て混亂の恐れがありますから、今日世間に唱へ來れる通り、唱へもし、授けもするのがよいと思ひます。悉曇の流派などを彼れ此れ申さず、僧俗一様に唱へることが信仰の統一上肝要と思ひます。

信仰上餘り六ヶしきことを穿鑿するは、却つて信心の邪魔になり、餘り奥深きことを求めば、還つて信心を亂し、往生を取り失ふ恐れがありますから、只だ光明眞言の一眞言のみ有り難しと諦信決定するのが肝要にて、眞言に不思議の功力あることを少しも疑はず、有り難く思ふ眞實心さへあれば、車夫は俵を引きながら、官吏は政務を執りながら、農工商は、農工商の職を勤めながら、二世の利益を被ること間違ひないのであります。ですから眞言の念誦は必ずしも御佛前には限りません、行住座臥心に掛けて、思ひ出せば眞言を唱へる、眞言を唱ふれば信心が呼び醒まされる、眞言を唱へると、信心の起るのとは、鐘と鐘木の関係のやうなものであります。所が此の光明眞言は念佛や題目に較べると少し長いので、一息には唱へ難く、大病の際などは息苦しきやうの感じがする、さういふ時は、ソナアボキヤの四字文を唱へてもよいのであります。古徳は若し光明眞言を皆な誦へ難き時は、ソナアボキヤの一回を唱へ、猶またソナアボキヤの四字も唱へがたき時は、唯だアボキヤの阿を心の内にて唱へ念すべし、その功德ともに甚深不思議なりと仰せら

れてあります。

七、懺悔滅罪の信仰

罪あらば懺悔せよ、懺悔すれば身も心も清められるであらう、罪あるものは身も心も穢れて居る、穢れた儘で佛の御前に出つるは非禮であり、無作法である、高貴の御方に拜謁するには先づ手足の汚れを清めねばならぬが如く、花の浄土の奥座敷へ住くには、三業の汚れを洗ひ清めることが必要であります。そこで我が眞言宗には佛前に向つて先づ懺悔の文を唱へます、我昔所造諸悪業の偈文を唱へて、説教の時には一座の聴衆に異口同音に唱へしめます。之れは先づ身口の二業を透うして更らに意業を淨化し、本統の懺悔の心を發さしめんが爲めであります。密嚴院發露懺悔の文を拜誦する時は思はず自分を願ひて身震ひするやうな心地がせられます。經規の中には召罪の印眞言があり、擯罪の印眞言があり、滅罪の印眞言があります。淨三業の印眞言は身と口と心とを清めるの法であります。彼の禮懺經は皆な懺悔を説いたお經であり、金剛界の禮懺經だ、胎藏界の禮懺經だ、或は五十三佛名の禮

懺だと云ふのは皆佛菩薩の御徳を恭敬し、禮拜して、無始以來の罪業を發露し、懺悔して無上菩提を祈り奉るの經文であります。

懺悔と云ふことは既往の罪業を悔ひ改めて將來は善根修養に勵むべき事を誓ひ奉るの意味にて、此の懺悔に事の懺悔と、理の懺悔との二種あり、事の懺悔と云ふは、身を以て三寶を恭敬し、禮拜し、口を以て佛徳を賛歎し、眞言多羅尼を讀誦し、意を以て佛の御慈悲を觀念し、身口意の三つを以て過去世の罪惡や、現在の過非に對し、衷心より慚愧懺悔するのであります。次に理の懺悔とは無始の昔より造り重ねし罪業は皆な心の惑ひより起つたと云ふことを徹底的に悟了するのであります。我等の罪業はごうして發つたかと云ふに、腹を立てるとか、貪欲心を起すとか云ふ事より道ならぬ行ひをするやうになり、その行ひによりて惡果を招くことになり、惡ひ境遇に觸れる時はだん／＼惡い方へ傾き、次から次へと惡い事を行ひ、惡い結果を招き、惡い果報に對して、更らに不平や怨恨や惡心を起し、惡心によりて、又惡事を行ふと云ふ風に際限なく六道の苦界に迷ふて居るのである。それを推し詰めて

考へれば三毒の煩惱より起り、その三毒の煩惱を今一つ推し詰めて見れば無明煩惱の一つに歸着する。その無明煩惱はごこから起つたかと云へば我等の心から起つたので、我等の心の迷ひの夢を覺まして見ればそこには曼荼羅の佛徳が燦然として輝いて居るのである。斯く罪業の根本を突き詰めて煩惱即菩提の幽旨を諦観するのを理の懺悔と云ふのであります。此の二種の懺悔の中我等は先づ事の懺悔の方より始めて、漸次三業を洗ひ清め、それから理の懺悔に進むように心掛けねばなりません。併し因縁の時が至りませぬと事の懺悔も却々容易にその心が起りませぬ、それを起させるには懺悔の文を唱へることが肝要であります。懺悔の文を唱へますれば自然にその功德に刺戟せられて理の懺悔に契達することができます。昔妙幢菩薩は夢に人の金鼓を撃ち微妙の伽陀を誦し至心に懺悔せるを聞き深く感動して忘れず、その音聲が耳底に沁み、更らに心魂に徹し、遂に理の懺悔に契ひ、妙果を得られたる旨金光明經に説かれてあります。

されば我等も至心に我昔所造の偈文を唱へますれば、その偈文はやがて

懺悔の幽旨に觸れ、精神に契ひ、無始の罪業は露の朝日に消ふるが如く、除滅せられること疑ひないのであります。維摩經に無始より已來造る所の諸惡は猶し闇室の如し、懺悔はまさに明燈一たひ照らせば昏闇皆な除くが如しと説かれてあります。併し懺悔の功德を曲解して、罪を犯すも懺悔すれば消滅するを以て、罪業恐るゝに足らず、杯と邪見の心を起してはなりません。懺悔とは今より後は決して再びかゝる惡業を犯すまじとのお誓ひを佛祖に對して致すのであります。

八、追善回向の意義

追善回向とは死者の爲めに善根功德を送り届けると云ふことにて、恰も遠方へ旅行せる人に金品を小包などにて送るやうなものであります。その追善の供養に二種の法があります。一は事の供養と云ひ、二は法の供養と申します。事の供養とは香を焚き、花を供へ、塔婆を建て、種々の供物を撃けて、死者の靈を祭るのであります。次に法の供養とは、經を讀み、眞言多羅尼を誦し、祕密瑜伽の法を修して、得脱を祈るのであります。

眞言宗には回向に際し、先づ召請の法といつて、死者の靈を招き迎へ、そして供物を備へ、經を讀み、心盡しの誠意を以て回向するので、此の場合死者はその回向供養の處に來りて、親しく法味と供養と追善とを受けられるのであります。されば妻子眷屬は眞心をこめて、香をさゝけ、お眞言を唱へて、冥福を祈らねばなりません。死者の靈は石塚無碍でありますから、どこへでも自由自在に往來ができるのであります。古人も神を祭ること神いますが如くせよと申しましたが、死者の靈がそこへ親しく來て居るとの信念を忘れては、折角の追善回向が空虚のものになつて仕舞ひます。然るに近時兎角それが形式のみに流れるやうの傾きあるは誠に遺憾の次第であります。遠方の親戚の人を招き迎へながらそれを疎略に取扱てはならぬが如く、遠い冥道よりはるく、死者の靈を迎へて供養するのであるから、妻子并に親戚の人々は、佛壇に背を向けて、餘談に耽るやうな不作法があつてはなりません。祖先の祭り供養は年忌の時のみに限るべきではなく、二六時中大切に勤めねばならぬ筈であります。が、家事の業務に追はれて、さういふ譯に參り兼

ねるのみならず、逝くものは日に疎しの諺の如く、月日が經つに従つてだんだん忘れ艸が生へるものであります。しかしせめて忌日命日とか、年忌追善の當日だけなりとも、大切に回向するやうにせねばなりません。四十九日、百ヶ日、一周忌、三回忌、七年、十三年等はそれ／＼深い緣由のある事にて、佛様は御經にその事を詳しく説かれてあります。家業が忙しいからとて、祖先の追善回向を怠りてはなりません。幾ら忙しくても、自分が三度の食事を忘れるものはありますまい。祖先の追善を勤めるは、單に死者の爲めと云ふばかりでなく、その家門繁榮の祈禱であり、國民道德の修養訓練であります。祖先を大切にするやうになれば、我國の國體は萬代不易であります。

さて然らば死者の爲めの進善回向は、どうするのが最善最良であるかと云ふに、先づ光明眞言を唱へて回向することが第一であります。その外にもたんと方法はありますけれど、簡便にして、何人にもできる回向は光明眞言を唱へる事であります。顯教によりて回向する時は、只だ天上に昇ることを

得るのみであります。密教によりて回向する時は往生成佛の大果を得ること間違ひないのであります。それは經文の上に澤山證文があります。顯教の經には追善回向によりて死者が淨土へ往生すると云ふことは説いてありませんが、密教の經にはたんとそのことを説いてあります。寶篋印多羅尼經には若し惡人あり死して地獄に墮せんに、その子孫のもの亡者の名を稱し、この神咒を誦する、僅かに七返に至れば、洋銅熱鐵忽然として變じて、八功德池となり、蓮生して足を承け、寶蓋頂に駐り、地獄の門破れて菩提の道開け、その蓮飛ぶが如くにして、極樂界に至るとあります。佛の大慈悲より云へば、生けるものを救はねばならぬことは云ふまでもありませんが、死者は一入勞はり助けねばならぬので、地藏菩薩は罪人に代りて地獄の苦を受けられるとさへ申します。大乘佛教の大精神より云へば、一切の男子は我父なり、一切の女人は我母なり、そして生々世々の間に、互に父母兄弟となり、その恩愛の關係は筆舌にも盡くされぬほど深厚でありますから、是等の六親眷屬の苦患を救ひ、出離得脱を祈らねばなりません。その出離得脱を祈るには、三つ

の要件があります。一は厭離穢土の心である、娑婆の苦みや、悲みや、惱みを早く脱せねばならぬとの心であります。二は欣求淨土の心である、微妙の快樂に満ちたる淨土に早く往かねばならぬとの心であります。三は衆生濟度の心である、一切の人類は生々世々の父母兄弟なるを以て、皆な救ひ出さねばならぬとの誓ひの心を起すのであります。

此の意味よりして、我宗には一返のお眞言を唱へ、一卷の經を讀むにも、必ず回向と云ふことを忘れないのであります。一切の衆生に此の善根功德を普く平等に回向し、施與すると云ふ事を一大要件とするのであります。彼の回向の伽陀と云ひ、回向の願文と云ひ、或は願以此功德の文の如き、或は乃至法界平等利益の句の如き、皆なその思想の表はれにあらざるはないのであります。

九、眞言の佛菩薩と多神教及偶像教

眞言宗の曼荼羅には藥師、釋迦、文珠、普賢等の澤山の佛様を載せられ、又各寺の本堂には不動、愛染等の明王及び梵天帝釋等の天部までを多く祭られ

てあります。之れを見て世人は波斯教、那維教等と同様に多神教の一種かと思ひ、又木像畫像等を禮拜せるを見て、偶像教の一種かと思ふものがあるかも知れない。——今頃そんな無智な考へを持つものは恐らくあるまいけれど——、念の爲めその點に就て兩者の相違點を一言して置きたい。

埃及教等に祭る偶像と、佛教の畫木像とは、その精神に於て天地の違ひがあります。彼等の祭る偶像は、死者の骨灰を以て捏造し、之れを祭拜して、只管死者の崇りを免かれ、その怒りに觸れざらんとするより來れるものにて、宗教學上より云へば、極めて幼稚なる思想と、信條の下に立脚して居るのであります。之れに反して我宗の佛菩薩は宇宙の大靈を人格化したるものにて、何れの佛菩薩も個我を超越せる、絶對の靈體であります。智惠の現はれを文珠菩薩として拜し、慈悲の現はれを地藏菩薩として崇めるので、何れの一佛について云ふも、皆な絶對の靈體であり、宗教學上にはゆる汎神教的教理に立脚して居るのであります。されば兩者は似て居るけれども大に違ふのである。喩へば同じ紙でも貨幣の紙と古新聞の紙とは價值が違ひ、同じ木片

でも額桴の木と下駄齒の木とは位が違ひ、同じ文字でも陛下の宸翰と兒童の樂書とは意味が異なるやうなものであります。

又多神教は多元的でありまして、甲の神は山河を造れりと信じ、乙の神は幸福を司り、丙の神は死を司り、丁の神は破壊を好む等と信じ、各々その主宰する所異りて、而もその間に統一がないのであります。之れに反して我宗の佛菩薩は絶對の大靈たる、法身大日如來が種々に活動作用を起して群機を教化せられる状態を表はしたのであります。例へば觀世音菩薩が三十三身を現して化益せられるが如く、又地藏菩薩が六道に六種の身を現はして六趣の衆生を化導せられるが如く、無量の佛身を現して、救済に力められる、その化他救済の御徳を、勢至菩薩と云ひ、普賢菩薩と云ひ、藥師如來とも申すので、種々無量の佛菩薩は法身如來の一佛に歸着するのであります。

今少し兩者の異りを申すならば、多神教にては多數の神々が各々その領分を定めて、封建時代の諸候が領内を支配して居たやうに、繩張りを決められて居るものと信じて居りますが、我宗の佛菩薩は一體の大毘盧遮那より、

無量の佛菩薩が影現せるものにて、恰も天皇の大權が、各省の大臣ともなり、各縣の知事ともなり、郡村長ともなり、判官、典獄、警官ともなるやうなものにて、一體の應現であり、その間に有機的の統一あることを信するのであります。哲學なども初めは多元論に發足して居りましたが、宗教も最初は大抵多神教に出達して居るやうであります。それが段々進んで一神教になる、之れは人間思想の進歩の順序にて、思想の統一を求め、信念の中樞を求め、その結果どうしても多神教を一神教に導かねば止まぬのであります。然らば一神教が最上の思想かと云へば、さうはいへないのである。人は單に理論のみを以て満足するものでない、宇宙は一つだと云つても、現に萬象が歴然として存在せるを見ては、單に一つとのみ斷定し兼ねるやうな感じがする、そこで最後に一と多の調和を求め、思想が現はれてくる、之れが汎神教であります。汎神教は最高の思想であつて、曼荼羅の諸佛菩薩は汎神教に屬する佛菩薩であることは、眞言宗の經典を繙けば、すぐ分ります。然るを初歩の多神教と混同して、兎や角の批評するなどはその人の無智を表白するものであります。

ます。

又彼等は神と我等は全然違つたものだと思つて居ります、それは多神教の人でも、偶像教の信者でも、又一神教の人々でも皆なさう信じて居ります。然るに我宗では佛と我等は異つたものでない、佛も元は凡夫なり、凡夫もやがては佛なりと信するのであります。そこに兩者の大なる相違があります。そこで我宗には佛菩薩に對して兩面の解釋があります。一面より云へば諸佛菩薩は我等の先進者であり、先輩であり、指導者である、故に尊敬と渴仰の誠をさゝげてその教へを奉體しなければならぬ。又他面より云へば、法界周遍の佛菩薩の靈徳が、三力加持の功能によりて、或は畫像に托し、或は木像を透うして、神驗と靈益を現はして、我等を利益して下さるから、繪木像を直に眞實の佛菩薩なりと信じて、恭敬し、尊崇し、信仰せねばならぬと信するのであります。

十、現當二世の救濟

我等人間は、天地の悠久なるに比すれば、泡沫にも喩ふべく、微粒にも較ぶ

べき、實に弱ふな、果敢ないものであります。それにも拘らず不死の生命を得たいと云ふ廣大な要求を以て居ります。その悩みを救はんとするものが宗教であります。彼の未來教は唯だ頼むに足るものは、未來の極樂淨土のみだと、不死の生命をそこに求めるのであります。これによりて我等不死の生命に憧がるゝ人間の要求は幾分満たされます。けれども現實世界に憧がるゝ人間自然の要求は之れによりて満足せしむることはできません。そこで一部の人は科學的の人生觀を唱へ、物理の法則に依りて人生を説明せんとし、物質の集合離散によりて生命は支配されるものだといつて居ります。なるほど此の説は現實の世界を肯定したる點に於て強味を有つて居りますが、その代りに人生を無神無靈の物質現象に過ぎぬと云ふ點に於て、人心の奥底に流れて居る、至深の要求を満足せしむることができません。

我等が求むる人生の最大なるものは、現在の満足と、未來の救濟とであります。けれども現在の満足は容易に得られるものでなく、又未來の救濟も容易に得られるものでありません。こゝに於て弘法大師は現當二世の利益と云

ふことを説かれてあります。此の世は安穩な様、未來は幸福な様、といふのであります。佛の説法は未來の救濟のみでなく、又現在の救濟のみでなく、二世を救ひ、二世を助け給ふ所の法門であります。故に經には現世安穩、後生善處と説かれてあります。人は貧富貴賤の別あれど、一切の人に共通した大事が二つある、それは飢へず凍へず雨露に打たれざる用意と、死に臨みて煩悶狼狽せざる覺悟とであります。眞言宗に現世利益を説く趣意は單なる醉生夢死の生を守らんが爲めではありません。人にはそれらの使命があり、天分があり、爲さねばならぬ仕事がある、それを全ふせしめんが爲めであります。その中にて最も重大なる仕事は信心を決定して、生死を解脱し、不死の生命を掴むと云ふことであります。我等はいま受け難き人身を受け、會ひ難き密教に遭ひ奉りながら、迂かくと此の機を逸してはなりません。その爲めには病氣に罹れば病氣を療治して、身心を安穩にし、長命を保ち、往生の善業を成就するまでは、生命を大切に保持せなければなりません。佛天の加護を祈ると云ふこともその爲めに必要であり、良醫療藥によりて延壽の方術を講

すると云ふこともその爲めに必要であります。病氣平癒の祈禱を爲し、天下泰平の祈禱を爲し、或は家内安全を祈り、風雨順時を祈るも皆なその爲めであります。丁度學問修學に際しては、種々の障礙を除かねばならぬが如く、菩提心の向上を謀る爲めには、心の病患を禳ひ、身の災難障殃を除き、四圍の魔障を退散せしめなければなりません。それを佛天に祈れば佛天はその願ひを聞届けて下さるのであります。佛天の御本誓はさういふ場合に守護し冥助して遣らうと云ふのであります。真言宗に四種五種の祈禱法があるのはその爲めであります。真言宗の現世祈禱を目して迷信だと云ふものがありますが、決して迷信ではなく、正だしい信仰なのであります。併し教理を辨へず、祈禱の主旨を忘れたる祈禱は、迷信に陥る恐れがあるから、その點は大に注意せねばなりません。殊に名聞利養の爲めに祈禱を爲し、妻子眷屬の愛着の爲めに祈禱を爲すは、生死輪廻の妨げとなり、無明煩惱の迷ひを深からしむるを以て堅く戒めねばならぬと古徳は諭されてあります。信心を起さしむる爲めには、施主の希望に任せて祈禱を爲すも方便なれど、信心向上の眼

目を忘れては邪道になるのであります。

真言宗の現世利益を説く趣意は大略右の通りであります。次に未來の救済はどうかと云ふに、教益不思議の力を信する外はありません。真言念誦の功力に依り、往生淨刹間違ひなしと、決定諦信が出来ますれば、死後の不安は一切除かれ、不死の生命はそこに見出されます。さすれば死門に臨むも、春日行樂の如き思ひを爲すことができます。親しく大師の御手引きに預り、有縁の淨土に往生させて頂くことができますので、之ほど嬉しいことはありません。

結 論

真言宗の教義は汲めども盡きぬ泉の如く、書いても書いても果てしが無い。最初筆を執る際には真言宗の梗概、構造、組織の大綱を一目の下に分るよう、御紹介したいと思つて居りましたが、さて愈書いて見ると、逆もそれは限りある紙上にて、私共の如き淺學のものゝ能く爲し得べき所でないこと云ふことが判りました。そこで今回は此の邊にて切り上げる事に致します。最も

真言宗に對する大體の概念だけは以上述べた所により略得られたことゝ信じます。私の最初考へて居た構想より云へば、その半分位しかまだ書いて居ないのであります。それは教義上の關係問題としては、修驗道の事であるとか、兩部神道の事であるとか、真言律宗の事であるとか、或は婆羅門教并に佛教各宗との關係であるとか、云ふやうな問題があり、又歴史上の問題としては、大師以前の日本に於ける密教後七日御修法、後入唐八家、歴代皇室の御叡信、宗内制度變遷等といったやうな問題があり、信仰上の問題としては、大日如來と釋迦如來との關係、彌勒信仰と彌陀信仰、真言宗の人生觀并に國家觀といったやうな問題があるのであります。しかし是等の問題は他の諸講師方のお話中にもちらほら述べられてあるやうでありますから、凡て省略することに致しました。若し十分お判りにならぬ様でありましたら、有縁の善知識にお尋ねになるとか、或は書物に就て御研究下さるやう希望いたします。

何分真言宗はこれまで萬事秘密主義にて、教義の民衆化と云ふやうな事

は餘り考へられて居なかつたのであります。明治維新の際までは布教傳道と云ふことは殆んど仕なかつたのであります。偶說教などを爲すものあれば、談議僧といつて賤めるやうな風があり、それが爲め布教傳道に就ては萬事甚だ幼稚で、布教傳道に關する平易な書物等は甚だ少なく、通俗的の説明とか、教義の宣傳とか、云ふ事は丸切り閑却されて居りました。従つて教勢も沈滯不振の状態に陥つて居りましたが、近時各方面とも大に目醒めて參りましたことは喜ばしいけれど、何分千有餘年の久しい間、染み着いた、貴族的風習は容易に取り消されさうにない、各派の本山へお参りになれば貴族的の遺風が如何に濃厚に滲うて居るかを直に看取されるのでありませう。堂塔は巍然として聳へ、殿舎は宏壯にして城郭の如く、而も金壁燦爛として眩ゆきばかり光り輝いて居る。併し信仰の道場として、教化の根源地として、眺めた時坐ろに心細さを感じざるを得ないものがあります。之れは本山だけがさうなのではなく、一萬有餘の末寺末刹も皆さうなのである。此の風習は是非改めなければならぬと思ひます。それには本山も末寺も僧侶も俗人も皆

なが思ひ揃つて氣風を一新せなければなりません。現在の眞言宗には改めなければならぬものがたくさんある。正宗の名刀も久しく篋底に秘すれば鑄が出る如く、眞言の教義にも種々なる迷信や妄信の鑄が着いて居ります。その鑄は支那の道教より來たものもあり、日本の陰陽道より來たものもあり、又印度の婆羅門教より來たものもあり、随分如何がほしいものばかりが附着して居ります。それを判別することは大難事にて、大圓鏡智の力に依らねばなりません。兎に角大改造を要すると思ひます。教義の上にも、信仰の上にも、制度の上にも、改めねばならぬことが澤山あります。ある部分に就ては復古的に改めねばならぬ點があり、又ある部分に就ては進化的に改めねばならぬ點があります。何れにしても現状の儘ではどうしても今後の社會人心を指導教化して往くことは難かしいと思ひます。幸に同法門下の大覺醒と奮起により、佛日増輝を切に希望致します。

眞言宗大綱終

密教研究叢書第一編

大正十四年二月二十八日印刷
大正十四年三月三日發行

(定價金壹圓五十錢)

不許
複製

著者

蓮生 觀善

發行兼
印刷人

伊豆 宥法

印刷所

佛教藝術社印刷部

東京市牛込區若宮町三十五番地

發行所

東京市牛込區若宮町三十五番地

電話牛込二五二三番
振替東京五〇一八十五番
大阪六八四〇五番

佛教藝術社

販賣所

振替大阪七三八番

京都市三哲通大宮東入
六大新報社

520

32

終

